

## 柴四朗の言論活動——政治と思想の実践——

高 井 多佳子

はじめに

柴四朗（一八五二—一九二二）は明治大正期の政治家であったが、当時ベストセラーとなった政治小説『佳人之奇遇』の著者東海散士として名を残している。しかしながら、文名の高さに比してその生涯の詳細を知る史料は少ない。

柴四朗の履歴を知ることができるものとしては、同時代に著された『絵入自由新聞』掲載の「東海散士詳伝」（明治二十年九月）、血涙居士著『志士壮士 民間人物論』（能勢土岐太郎発行、明治二十一年三月）、『福島県名士列伝』（福島活版舎発行、明治二十三年五月）、山崎謙編『衆議院議員列伝』（衆議院議員列伝発行所、明治三十四年三月）等があるがいずれも簡略な記述にとどまっている。<sup>1</sup>けれども柴の場合、『佳人之奇遇』をはじめとする著作物に自叙伝の如き内容を持つものが多いので、その著作の虚構と事実を注意深く読みわけること、ある程度その生涯の概略を知ることができるといえる。

79

研究史としては、柳田泉の『政治小説研究』をその嚆矢としてこれまでいくらかの蓄積があるが、いずれも柴四朗個人に関する研究というよりは、その著作、なかでも代表作『佳人之奇遇』の作品論に主眼が置かれる場合が多い。『佳

人之奇遇』が柴の自叙伝的要素も含む作品であることから、作品研究が自ずと柴四朗個人についての研究ともなるが、いづれにしても、「政治小説」を論じる中で逸することのできない作品の一つとして文学研究の立場から言及されることがこれまで多かったのである。<sup>(2)</sup>

近年相次いで柴四朗に関する書籍が出版された。大沼敏男・中丸宣明校注『新日本古典文学大系 明治編 政治小説集二』（岩波書店、平成十九年）には『佳人之奇遇』全編が収録されている。そのうち初編巻一から五編巻十には詳細な注釈が付けられていることから、これまでに一般には読みにくい書であったものが利用しやすくなった。なお、同書に収載されている大沼敏男「東海散士柴四朗略伝―人と思想」は、柴四朗のアメリカ留学時代の動向に詳しい。しかしながら、その略伝が言及するのは『佳人之奇遇』の舞台となっている時期（閔妃暗殺事件後）までにとどまる。

中井げやき『明治の兄弟 柴太一郎、東海散士柴四朗、柴五郎』（文芸社、平成二十年）は、柴家の兄弟の生き様を通して明治から昭和敗戦までの近代日本史を描いた伝記である。同書はこれまで知られてこなかった逸話も交えながら柴四朗の生涯を概観できるが、柴の履歴や執筆記事に関する記述にいくつかの誤りが認められるので注意を要する。<sup>(3)</sup>

筆者は、柴四朗が現実の政治家として政治活動を行った人物であったことから、柴は当初から小説家としてではなく、はじめは政治を志す者として、そして後には政治家として、『佳人之奇遇』という名の政治論説書を書き継いでいたのだということを繰り返し述べてきた。またその一方で、新聞雑誌にみられる柴の政治論説等を渉獵しこれまでその思想について若干の考察を試みてきた。<sup>(4)</sup>

柴四朗は当時国外へ出て世界をその目で実見した日本人の一人である。その知見が柴に世界の中で日本がおかれた状況をどのように認識させ、日本のあるべき姿、また日本の進むべき方向をどのように志向させたのか。そして、目まぐるしく展開していく世界情勢に絶えず影響を受けつつ、その志向をどのように変容させていくのか。且つその志向の実

現に向けて何をしたのかを明らかにし、近代日本史において柴四朗の果たした役割を考えたのである。そこで本稿では、柴四朗の生涯を通して彼の当時の思想および政治的位置を明らかにしながら、段階を踏まえて彼がどのような言論活動を行ったのか。そしてそれが柴の政治活動とどのような関わりがあったのかということを検討していきたい。

## 1 『佳人之奇遇』発刊まで

### (1) 言論活動の開始

柴四朗は、会津藩士柴佐多藏由道の四男で、嘉永五年（一八五二）十二月、幕府が会津藩に命じて設置させた安房国富津の会津陣屋で生まれた。父佐多藏は二八〇石の御物頭、格役黒紐に属する身分で、常に上下着用を許され大組物頭の指揮下にあった。四朗は幼名を茂四郎といい、幼い頃から多病であったという。会津で藩校日新館に学んだが、文久二年（一八六二）に藩主松平容保が京都守護職となると、精選組隊長に任命された父と長兄太一郎と共に上洛した。

慶応四年（一八六七）正月の鳥羽伏見の戦いでは、十六歳の四朗も会津藩の兵士として出陣したが、幕府軍が新政府軍に敗北すると会津へ帰った。帰藩後は、当時会津藩で軍事顧問をしていた幕臣沼間慎次郎（守一）の塾に入ってフランス語を学んだという。

同年八月、新政府軍の会津討伐が始まり、白虎隊に編成されていた四朗も病気を患って城中に赴いたが、この時も熱病のため城中で横臥し戦闘には加わることなく生き残った。<sup>5)</sup>九月二十二日、会津城落城、四朗は父、兄と共に十月には猪苗代の収容所に移された。明治二年（一八六九）六月には東京に護送されて音羽護国寺の俘虜収容所に移された。翌三年に旧会津藩の移封地斗南に移住、旧会津藩が斗南に設けた英語学校で学んだ。次いで上京して沼間慎次郎の塾に入り、さらに山東直砥が設立した北門社に学んだという。明治五年頃には広沢安任の経営する斗南の牧場で、お雇い外国

人であるイギリス人技師の通訳をした。その後、父を手伝い開墾に従事した時期もあつたが、修学を志して函館にわたり、また弘前に出て東興義塾に入るなど転々としながら学んだという。同六年末頃、会津に帰り日新館に学んだが、やがて上京して神田橋外の本田邸の一室で兄太一郎、第五郎と兄弟三人で仮寓した。その後、兄太一郎の周旋で横浜税関局長柳谷謙太郎の書生となつた。ここで認められて同八年から同十年までの三年間は学資の補助をうけて学業に専念することができたといひ、この頃から『東京日日新聞』に論説文を寄稿するようになった。柴四朗の言論活動の開始である。

この時、『東京日日新聞』に寄稿した柴四朗署名記事についての詳細は、拙稿「東海散士柴四朗の政治思想——政治小説『佳人之奇遇』発刊以前——」を参照されたいが、とくに注目すべきものに「東洋美人ノ歎」と題された一文がある。これは後の『佳人之奇遇』を彷彿とさせるような内容と構成を持ち、柴の世界観を知る上で重要な意味をもつものである。柴は、日本を東洋の少女「蜻和」に、西欧諸国を「西家富貴ノ遊冶郎」に見立て、日本が初めは嫌悪していた西洋文明に心酔しそれを模倣することに汲々としていく様を叙述する。そして西欧諸国が、「羊裘ヲ衣テ其心ハ豺狼ノ諺ノ如ク、外ニハ恋着愛憐ヲ表シテ内ニハ貪戻情慾ヲ恣ニシ、蜻和ノ田畝家財ヲ掠メ去ラントスルノ企」を抱いていることに日本は気付かず、「身体益々虚弱ニ精氣愈々衰ヘテ黴毒皮膚ニ顯ハレ形容枯槁シタリ」と述べる。目覚めてみればこれは夢であつたが胸中にはなお「悲哀ノ念」が残る、よつて「東洋美人ノ歎」と名付け著述したが「区々ノ寓意」を込めたのだと結んでいる。すなわち柴は西欧列強による侵略の危機を顧みず、皮相の欧化に走る日本の現状を案じ国家衰亡の危機が迫っているのだと日本の行く末を悲嘆しているのである。柴の世界認識の原型がここにはある。

『東京日日新聞』への寄稿の中で、いまひとつの注目記事がある。明治十年（一八七七）に西南戦争が起こると、旧会津藩士も多く出征したが、柴は彼等へ向けて「送友人西征」という一文を書いた。薩摩藩を「天下ノ逆賊」、「人民自

由ノ公敵」と呼び、「鹿児島ハ早晚破裂ヲ免レザル可シ、此時ニ当リテハ被堅執銳、明治政府ト存亡ヲ共ニセン（傍線筆者、以下同じ）」と「西征」に赴く旧会津藩士を鼓舞している。<sup>(8)</sup>西南戦争には柴自身も山川浩が率いた別働第二旅団の臨時將校となり従軍した。<sup>(9)</sup>第五郎の回想録によると、柴は出征前に五郎へ「今日薩人に一矢を放たざれば、地下にたいし面目なしと考え、いよいよ本日西征軍に従うため出発す。凱旋の日面会すべし。学業怠るなかれ」という旨の書簡を送ったという。<sup>(10)</sup>柴が戦況を報じた書簡は、『東京日日新聞』、『東京曙新聞』に連載された。<sup>(11)</sup>会津人であるということが柴の重要なアイデンティティーであるが、そうでありながら、柴が敗者に対する共鳴、共感を持たず、勝者としてやがて得ることになる「権力への意志」を見つめていることに注意しなければならない。これより先、明治九年十月二十九日に起こった思案橋事件に対して同藩士に書き送った柴四朗書簡が、やはり『東京日日新聞』に掲載されたことがある。<sup>(12)</sup>これは不平士族に煽動されて無闇に反乱に与しないように諫めるものであるが、その根柢を柴は次のように述べている。

「吾輩ノ義務タルヤ、上政府ノ政令ヲ守リ下人民ノ安寧ヲ謀リテ共ニ康福ヲ受クルニアリ、故ニ仮令ヒ政府ガ其ノ権限ヲ越エ人民ノ權利自由ヲ剥奪シ賦斂課税ヲ重クシ殘虐至ラザル所ナキノ日ニ逢フトモ、席旗竹槍ノ暴挙ヲナスハ甚ダ不可ナリ、然ルラ況ンヤ正明無私ナル明治政府ノ下ニ保護セラレナガラ大義名分ノ在ル所ヲ忘レテ賊徒ニ与ミシ万一ノ私利ヲ僥倖スルニ於テヤヤ」というのである。先の「送友人西征」にも明らかなように、柴が既に明治政府すなわち権力者側にたつ論理を持っていることに注目すべきである。

柴にとつてはこの参戦が機縁となり、熊本鎮台司令長官であった谷干城はじめ多くの人と知遇を得、岩崎家の援助を受けてアメリカ留学が実現することとなった。

## (2) アメリカ留学

明治十二年(一八七九)一月、アメリカに渡った柴四朗はサンフランシスコの商法学校(Pacific Business College)

に入学した。同十四年春頃、ケンブリッジのハーバード大学で学び、続いてフィラデルフィアへ移り、ペンシルヴァニア大学に開校したばかりのワートン理財学校(Wharton School)に第一期生として入学し経済学を専攻した。<sup>(13)</sup>ここで柴はトンプソン(Robert Ellis Thompson 一八四四―一九二四)に経済学を学んだ。<sup>(14)</sup>後に柴はHenry Carey著・犬養毅訳『圭氏経済学』に署名「米國経済学士柴四朗」として跋文を寄せているが、その記述で留学中の様子を知らることができる。<sup>(15)</sup>

今ヲ距ル十二三年前、学友犬養兄、英國経済学派ノ誤レルヲ看破シ、馬場辰猪、大石正巳、豊川良平諸友ト東海経済新報ヲ発兌シ、世人ノ迷ヲ醒サント勉ムルニ当リ、余亦米國ニアリテ遙カニ之ニ賛助セリ、蓋其祖述スル所多ク、圭先生(Henry Carey)ノ論旨ヲ奉シ、経済ノ要ハ國家ノ形勢如何ニ依リテ斟酌応用スベキモノニシテ、英國学派ノ唱導スル如ク宇宙万国

同一ノ経済法ヲ施行スヘカラサルコトヲ反覆詳論シタリキ、余カ経済学ニ志シ笈ヲ負フテ米國ニ遊学スルヤ、先生没後数年親シク其教論ヲ受クル能ハサリシモ、先生ノ高弟士無孫師(Robert Ellis Thompson)、経済学ノ教頭タリシヲ以テ従フテ学フコトヲ得タリ、其他先生ノ高弟タリシ故スミスエルドル博士等ト交接ノ榮ヲ辱フシ、且常ニ圭先生ノ家ニ到リ、其書籍室ニ坐シ其遺書ヲ繙キ、其家塾ノ薰陶ヲ受クル数年、帰朝以來、諸友ト日本経済会ヲ創立シ、亦國家経済会ヲ発企スル所ノモノ皆学信スル所ノ道ヲ広メント欲スルノ微志ノミ

「圭先生」すなわち田〇ケアリ(一七九三―一八七九)はアイルランド移民でアメリカの経済学者である。イギリス古典派経済学を批判しアメリカにおける保護貿易主義の理論的指導者であった。柴がワートンスクールに入学する二年前に既にケアリは亡くなっていたが、柴はケアリの家で彼の蔵書で学んだとある。またここで述べているように、柴はアメリカ留学中の明治十三年から同十五年にかけて、犬養毅主宰の経済雑誌『東海経済新報』に記事を寄稿している。<sup>(16)</sup>

柴は終始一貫して保護貿易によるアメリカの繁栄を報告し、とくにイギリスの圧政によって抑圧され疲弊衰頹する国々

の実態を強調しながらイギリスの自由貿易を批判する立場で世界経済を論じた。ここには、ケアリ、トンブソンといったアイルランド出身の経済学者に学んだ影響が多分にみられる。<sup>17)</sup>

同十七年（一八八四）十二月、柴は二年間で全課程を修了し「Bachelor of Finance」[理財（経済）学士]の学位を得て卒業し帰国の途についた。

なお、帰国後の経済学士柴四朗は、同十八年六月に柳谷謙太郎、犬養毅、和田垣謙三、若山儀一と共に委員となり、国家経済の真理を研究し農工商の殖産を奨励し、教育を盛んにして衣食住の程度を高尚ならしめるため保護主義を採るという日本経済会を創立している。<sup>18)</sup>

### (3) 『佳人之奇遇』

さて、柴が帰国した当時の日本は、欧化主義盛んな鹿鳴館時代であった。明治十七年十二月に朝鮮国京城で甲申事変が起り、日本と清国の両国間は緊張状態であるにもかかわらず、帰国した柴が目にしたのは日本国内の「上流者歌舞遊樂之レ耽リ恬トシテ知ラザルガ如シ」（『佳人之奇遇』五編卷十）という状態であった。同年三月頃、柴は熱海の浴舎において、在米中に書きためた「偷閑ノ漫録」十余冊を六十日程で「集録削正」し『佳人之奇遇』と題したとその初編卷一「自叙」で説明している。『佳人之奇遇』は主人公東海散士がアメリカに留学中、スペイン人とアイルランド人の二人と一人の中国人老志士と邂逅し、彼らが抑圧されている民族の解放と独立のために奔走する中で様々な出来事が展開していくという物語である。同年十月、『佳人之奇遇』初編卷一卷二が刊行されると、たちまち評判を呼びベストセラーとなった。「其頃佳人之奇遇という小説が出て字を読む程の者は読まぬ者はなかつた」（徳富露花『黒い眼と茶色の目』大正三年十二月刊）と言われるほどによく読まれた。主人公東海散士（＝柴四朗）の一人称で語られる『佳人之奇遇』

のストーリーは柴自身の実体験に沿って進み、小説風脚色部分を除けばほぼ柴の自叙伝である。「佳人之奇遇」の各巻に序文および跋文を寄せた人々の顔ぶれをみれば、自ずと柴の思想および政治的位置が明らかとなってくる(表1参照)。

表1『佳人之奇遇』の構成

編	巻	序・跋	刊行年月	設定年代	事項	執筆時期
初編	巻一	引・隈山(谷干城) 自叙・東海散士(柴四朗)	明治十八年十月	明治十五年春	主人公東海散士、 滞米。	滞米時に素案。 帰国(明治十八年一月)後。
	巻二	書後・金玉均(朝鮮開化派指導者)	明治十八年十月	明治十五年春	〃	〃
二編	巻三	序・陽谷居士(後藤象二郎)	明治十九年一月	明治十五年 春〜夏	〃	〃
	巻四	跋・望洋居士(未詳)	明治十九年一月	明治十五年夏	〃	〃
三編	巻五	序・芳暉園主人(増島六一郎)	明治二十年二月	明治十五年夏	〃	欧米視察中 (明治十九年八月頃)。
	巻六	序・得庵居士(鳥尾小弥太)	明治二十年二月	明治十五年夏	〃	〃
四編	巻七	百字引・鈕叔平(清国志士) 贈東海散士柴君・泉南鉄鏡(榊原浩逸) 題後・天台道士(杉浦重剛)	明治二十年二月	明治十五年夏	〃	帰国 (明治二十年六月)後。
	巻八	序・梧楼(三浦梧楼)	明治二十一年三月	明治十五年夏	〃	〃
五編	巻九	自序・東海散士(柴四朗) 叙・広沢安任 総評・紫山(川崎紫山)北村三郎 評・木堂居士(犬養毅)	明治二十四年十一月	明治十五年夏 同十八年一月	〃 散士帰国。	明治二十二年冬に第一稿。 同二十三年〜二十四年に完成。
	巻十	歌・耕雲山人(荒尾精)	明治二十四年十二月	明治十八年一月 同十九年三月	欧米視察出発。	〃

八編		七編		六編	
卷十六	卷十五	卷十四	卷十三	卷十二	卷十一
跋・雲外居士（未詳）					
明治三十年十月	明治三十年十月	明治三十年九月	明治三十年九月	明治三十年七月	明治三十年七月
明治二十四年春 同二十八年冬	明治二十年四月 同二十四年春	明治二十年三月 同四年四月	明治十九年五月 同二十年三月	明治十九年四月	明治十九年三月
日清戦争 同三 閔妃暗殺事件	条約改正 同二 反対運動	帰国 同二 ト・ラヨシユに面会	イタリアで 同二 コシユエ に面会 同二 トルコで 同二 オスマン に面会	セイロン島 同二 でアラビ に面会	欧米視察
〃	〃	〃	〃	〃	明治二十九年 同三十年

以後、明治三十年まで書き継がれていくこの書は、所々に大国に抑圧され蚕食された小国の惨状をクローズアップさせた世界各国史を挿入している。そこで柴は一国が自由と独立を守り保つことの重要性を繰り返し説いた。そして今やアジア多難の時にあたり我が国日本が「牛耳ヲ執テ亜細亞ノ盟主ト為」というアジア盟主論を掲げて、「方今焦眉ノ急務八十尺ノ自由ヲ内ニ伸ハサンヨリ寧ロ一尺ノ国権ヲ外ニ暢フルニ在リ」（初編卷二）と国権伸張を宣言した『佳人之奇遇』は、世界の歴史に学んで日本の進むべき方向性を論じた柴の政治論説書である。<sup>19)</sup>

なお、『佳人之奇遇』には当時から代作説、合作説が存在するが、このことについての筆者の見解は拙稿「東海散士著『佳人之奇遇』の成立について」で既に述べた。<sup>20)</sup> 筆者が同書稿本（慶応義塾図書館蔵）を調査したところ、柴が第一稿を執筆していることに疑いはなく、添削箇所においても政治的意見についてはその思想内容にまで及ぶ程のものではないことから、『佳人之奇遇』は柴四朗の思想が貫かれた政治論説書として考えて問題はないのである。

『佳人之奇遇』五編巻十には主人公散士がアメリカ留学を終えて帰国する途次、船上で甲申事變の一報を知る描写があるが、帰国した明治十八年一月以降に、柴は犬養毅の紹介で日本に亡命した朝鮮開化派の金玉均、朴泳孝と知り合つた。<sup>(21)</sup>日本国内の情勢に危機感を感じた柴はある時は「縉紳」を訪ね、ある時は「畏友」と、ある時は日本に亡命中の金玉均と、盛んに朝鮮問題ひいては東洋の時事を議論する機会をもつた。<sup>(22)</sup>金玉均は『佳人之奇遇』初編巻二に跋文（明治十八年八月）を寄せているが、当時柴が金に求めたものである。これ以後柴は朝鮮問題に深く関わっていくことになる。

## 2 新聞雑誌の創刊

### (1) 欧米視察

明治十八年（一八八五）十二月二十二日、日本最初の内閣が成立し谷干城が農商務大臣として入閣すると、柴は谷に懇請されて大臣秘書官となった。内閣総理大臣伊藤博文の勧めにより谷の欧米視察（所轄事項調査のため）が既に決定していたが、柴は秘書官就任条件として欧米視察随行を願い出てその随行が叶った。<sup>(23)</sup>視察は約一年四ヶ月にわたるものであったが、この欧米視察について柴は『佳人之奇遇』六編巻十一から八編巻十五（明治三十年刊）において叙述している。ほかにこの視察の詳細を知ることができるものに、谷干城『洋行日記』があり、また農商務省による『欧米巡回取調書』がある。<sup>(24)</sup>

谷一行は、明治十九年三月十三日横浜より出航し、香港、サイゴン、シンガポールを経て、四月三日セイロン島着。ここでエジプト独立運動の敗将アラビー・パシャ（Arabi Pasha 一八三九～一九一）に面会し、その影響をうけて急遽エジプトを視察した。四月二十六日パリ着。五月二十七日にパリを発ち、スイス・ドイツを経て、六月一日ウィーン着。七月二十六日よりウィーンでシュタイン（Lorenz von Stein 一八一五～一八九〇）の講義を受けた。十二月十二日

までに三十四回行われた講義内容の一部は、柴によるこの講義の記録「澳國ノ硯儒スタイン 谷農商務大臣質問筆記」に記されている。<sup>(25)</sup> この筆記によつて、谷がロシア陸軍演習陪覽や病氣療養のためウィーンを離れている間も、柴のみがシュタインの講義を聴き議論を重ねていたことがわかる。堀口修「明治立憲君主制とシュタイン講義―天皇、政府、議會をめぐる論議―」は、「柴は」欧米の事情に通暁している上に、民権論者であるため以後の講義において谷より一層鋭い質問や反論を試みるのであった。」と述べている。そもそも政府が進める欧化政策を批判的に見ていた谷と柴は、欧米列強を实見することで、列強に対峙して国家の独立を維持する方途を模索しようと各種施設を視察して近代国家をとらえようとした。シュタイン講義の影響はこれ以後の谷および柴の行動にもあらわれるが、とくにこの講義の中で朝鮮問題が議論されていることに注目しておきたい。八月五日の講義で、シュタインが「外交近取ノ策ヲ取ラハ日本ハ歐洲中ニ介立スルモノト違ヒ大ニ機ノ乘スヘキモノアラン。日本人ハ三千七百万ノ衆ナキニ非ラスヤ。早く朝鮮ヲ占領セサルヤ。」と述べると、柴は「僕ノ持論亦如此。」と答えているのである。<sup>(26)</sup>

ウィーンで柴は鳥尾小弥太から『佳人之奇遇』五編卷六に寄せた序文を得ている。後に柴は鳥尾小弥太著『洋行日記』(明治二十一年九月刊)に書後を寄せている。それには同地で柴と鳥尾は同宿し「終日討議論弁往々夜半に至る」等とありウィーン滞在時の様子を知ることができる。<sup>(27)</sup> 谷一行は十一月一日、ベルリンに向かった。その後トルコへ赴き、途中再びウィーンでシュタインを訪ね講義を受けた。十二月十三日、ウィーンを發つ。ハンガリー、ロシア、ドイツを巡り、十二月にはトルコで皇帝とオスマン・パシヤ (Othman Nuri Pasha 一八三七―一九〇〇) に面会した。翌二十年、ギリシヤ、イタリアへ、三月に柴は単独でトリノに亡命していたハンガリー独立戦争の英雄コシュート・ラヨシュ (Kossuth Lajos 一八〇二―一八九四) に面会している。<sup>(28)</sup> 四月、パリに戻り、イギリス、アメリカを経て、六月帰国した。なお、柴はこの洋行中も『佳人之奇遇』三編卷五卷六を執筆し、その草稿を日本の高橋太華に送っている。<sup>(29)</sup> この編以降、

『佳人之奇遇』にはこの洋行の見聞が大いに反映されるのである。

この欧米視察を通じて谷干城は政府批判の姿勢を一層強めて帰国した。国内の政治情勢は井上馨の条約改正案をめぐる対立が顕著になっていた。井上の改正案は法権と税権を回復し対等条約を得る方法として、外国人法官制を採用し法典編纂は外国による承認を必要とし内地雑居を許可するというものであった。七月三日、谷は総理大臣伊藤博文に条約改正に関する「意見書」を提出した。ところで、当時からこの意見書は柴の起草になるという説がある。<sup>29</sup>堀口前掲書はこのことについて「シユタインが条約改正の意見を述べた明治一九年八月二日は、柴のみが出席していたので、彼のその起草に与かったとの説は相当信憑性がある」と指摘している。おそらくそうなのであろう。七月十一日、谷はシユタインにその草稿を示して意見を求め修正を加えていた時弊弾劾の書「国家の大意」を内閣に提出した。

この結果、井上の条約改正交渉は事実上中止となったが、谷は七月二十六日付で農商務大臣を辞した。柴もそれに従い秘書官を辞し静岡県興津清見寺に隠棲し、同年八月にはその地で、『佳人之奇遇』四編巻七巻八を執筆した。この思うに任せない不遇な状況で執筆した巻八に柴は特別な意味を込めた。巻八には、洋行中に柴単独でトリノにおいて面会したコシュートが活躍するハンガリーの独立運動闘争史が語られる。そこでオーストリア政府の政策および宰相メツテルニヒの反動政治を非難することで、実は柴は現時の日本政府の政情および内閣総理大臣伊藤博文を批判しているのである。明治二十五年二月の第二回衆議院議員総選挙の際、柴はこの巻八こそが自らの「政治上の意見」であると反政府の立場を明らかにして立候補することになる。<sup>30</sup>

なおこの時、清見寺では東海散士著『東洋之佳人』（博文堂、明治二十一年一月刊）初稿も完成しているが、これは先に述べた柴が『東京日日新聞』に寄稿した「東洋美人ノ歎」を素案として、高橋太華が筆を執ったものである。<sup>31</sup>

この頃、柴は執筆活動にのみ専念していたわけではない。当時、反政府運動を展開させつつあった後藤象二郎の大同

團結運動に賛同し、同志を求めて全国を「漫遊」していたのである。<sup>(33)</sup>このことは末広重恭（鉄腸）著『現今の政事社会』（博文堂、明治二十年十月刊）に柴が寄せた序文にも明らかである。同書は大同團結運動の政談演説会で末広が演説したもので、柴の序文は同書を読んで末広が宛てた書簡の体裁である。柴は、「（同書は）小生が常に抱く主義と大同小異にて、去夏朝野諸名士の間に遊説致候も、小異を棄て、大同を結び国家の改良を希望仕候次第にて、又皮相外形の開化を後にし有用実利之文明を前二し、勤儉主義にて国家の實力を養ふ進路を主張致候事二御座候」と述べているように、「去夏」つまり欧米視察から帰国した同二十年夏に遊説の旅をしていたことが知られる。同書には柴の他に後藤象二郎も序文を寄せ、跋文は尾崎学堂（行雄）、徳富猪一郎（蘇峰）が寄せている。この顔ぶれからも明らかのようにこの書物は大同團結の世論喚起を行う目的のために刊行されたものであった。

## （2）『大阪毎日新聞』と『経世評論』

明治二十一年（一八八八）四月、陸羯南を社長兼主筆とした新聞『東京電報』が創刊された。柴は創刊とともにその社友となり、創刊号に東海散士署名記事「地方自治」を書いている。これは市制・町村制施行に先立ちその懸念するところを述べて、日本の中央集権政治、欧化政策を批判したもので、柴は政府内の組織改革および費用の削減を求めている。<sup>(34)</sup>

この『東京電報』紙上で柴は十五回におよぶ連載記事を書いた。当時、坑夫虐待問題で世間を騒がせていた高島炭坑を自ら实地視察し、その報道記事として書いた「高島炭坑視察実記」である。<sup>(35)</sup>この記事は、現地視察を行った柴が経済学士らしく冷静かつ現実的にその実態を分析した結果、日本で初めて世界的水準に近付きつつある施設を備えた高島炭坑経営が成功することを企図し、昂騰する世論を沈静化させるために書かれたものであった。<sup>(36)</sup>

同年十一月、柴は大阪に移り『大阪毎日新聞』の改題発行を手がけた。当時その文名の高さから大阪の実業家より招聘されて主筆に就任したのである。柴の主筆就任を、「柴四朗の決心は）兼ねて柴氏が執るところの国粹保存主義を唱道」することであると報じた『東雲新聞』記事に明らかなように、柴は改題発行号の「発行主意」で堂々と「国粹保存主義」を標榜した。<sup>(37)</sup> 国粹保存主義とは、同年成立した政教社発行の雑誌『日本人』および新聞『日本』関係者の周辺思想で、欧米追隨の近代化路線を批判し、日本固有の価値に依拠して世界に対峙しながら日本の近代化を進めていく方向を模索する思想である。「国粹」の語は『日本人』主筆志賀重昂が、*'Nationality'* を「国粹」とはじめて翻訳している。柴は「徒らに欧米の文化に眩惑し浮慕し以て欧米の事々物物を我国に採用し以て外観の文明に甘んずるが如きは吾輩の深く執らざる所とす、殊に芸術上の緻巧、忠孝節義の如きは是れ本邦固有の美俗なるを以て將に務めて之を保存せんとす」と新聞発行主意に述べたのである。注意深く「国粹」という名称こそ用いられてはいないが、これはそのまま「国粹保存」の主張であるといえよう。

これに先立つ同年六月に柴は『日本人』に「答客難」を寄稿している。<sup>(38)</sup> これはモンテネグロの「独立自治ノ精神ト人  
民ノ愛國心ヨリ発スル国民ノ氣力」を説いて、これに日本も学ばねばならないと論じたもので、これもまた柴の「国粹保存」の主張なのである。<sup>(39)</sup>

続く同年十二月、柴はこれも大阪で政治雑誌『経世評論』を創刊した。これは「或書肆から東海散士編集と銘打って一雑誌を出したい」との要請を受けた柴がやむを得ず承諾したものの自身は多忙の身であるので、池辺三山を主筆として博文堂出張店である経世評論社（大阪市東区今橋）から創刊したものである。<sup>(40)</sup> 柴は第一号に「欧羅巴ニ心酔ス」という論説を発表した。<sup>(41)</sup> 柴は洋行の際に目撃し、「心酔」するほど感銘を受けたトルコの「民人」の「氣風」を叙述して、列強に対峙して国家が独立を維持するためにその国の民が備えねばならない「国ニ報スル一片ノ赤心」を説いている。柴

は現時点で日本はヨーロッパ中で最も衰頹しているトルコにさえもその「形勢国風」においては及んでいないのだと痛論しているのである。<sup>(42)</sup>

翌二十二年二月十一日の大日本帝国憲法発布同日、陸羯南主筆の新聞「日本」が創刊された。これは、前に述べた『東京電報』がわずか十ヶ月で廃刊した後、紙名を改めて谷干城、浅野長勲等と杉浦重剛を中心とした乾坤社同人等が創刊したものである。雑誌『日本人』が「国粹保存主義」を提唱したのに呼応するように、『日本』は外部に「国民精神」を發揚し、内部に「国民団結」の鞏固を勉めると述べて「国民旨義の実行」を掲げた。『経世評論』創刊時に『日本』はまだ創刊されていないが、柴はそれに先駆けてトルコを例証として「国民」の形成の必要を説いたのだともいえる。『経世評論』誌上に柴の署名論説は多くはないが、帝国憲法発布に際して「欽定憲法」を批判した「帝国憲法疑解」(ただし未完)、同じく内閣の責任が規定されていない「欽定憲法」下の内閣を批判した「欽定内閣(東洋のビスマルク)」という注目すべき論説も書いている。<sup>(43)</sup>

ところが同年五月十六日、柴はわずか半年で大阪毎日新聞社を退社した。関係者の証言に基づいてその経緯を整理すると、主筆柴四朗は文章の才はあったが新聞界の動きに鈍感であり、経営に不向きで紙面の上においてもこれという特色を出さなかつたという。そのうえ、柴は大同団結を掲げた政治運動に熱中し、往々にして社の根本方針である不偏不党の主義に背馳することもあった。またしばしば上京して不在がちなので社内の統制も自ずから弛緩して、『大阪朝日新聞』、『東雲新聞』などに押され世間の人気は揚がらなかつたといひ、やがて柴を不満とした資本主等は次期主筆に『時事新報』記者であつた渡辺治を選んだ。これが早くに報道され大阪に洩れたため、柴他七名は連袂退社を決行したのである。<sup>(44)</sup>

号数不詳といわれているが、『経世評論』も二〇号が発行停止処分を受けたのを最後に廃刊に至つたとみられる。<sup>(45)</sup> 大阪

の地で柴が試みた新聞と雑誌を主宰しての言論活動は思うようにはいかなかったといえる。

大阪毎日新聞退社後、柴はまもなく『日本』社友となった。同年五月二十一日の『日本』社告に「東海散士柴四朗氏は是迄大坂に在りて大坂毎日新聞の主筆たりしが、今般事故ありて同新聞を謝絶し、以後は多く東京に居住して著述に従事し、且つ時々地方漫遊を為すの旁ら其の健筆の力を『日本』に分つこと、為れり」とある。その月から谷、佐々友房等と共に地方遊説のため東北を訪れた折の「東北漫遊紀行」を同紙に寄稿している。<sup>(46)</sup>

### (3) 『埃及近世史』

条約改正案が失敗に終わった井上馨の後任として大隈重信が外務大臣となったが、大隈の改正案も原則的に井上案を踏襲するものであったことから、再び条約改正反対運動が起こった。当時、大同団結運動の中心人物後藤象二郎が黒田清隆内閣の通信大臣として入閣したので運動は分裂していた。柴は後藤に代わって谷を中心に政党を作ろうとして奔走したが実現にはいたらなかった。

明治二十二年（一八八九）十月十五日、三浦梧楼は外務大臣大隈重信の条約改正案に反対し、当時学習院院長であった地位を利用して天皇に拝謁し、条約改正反対の上奏文を提出した。この上奏文草案を書いたのが柴であったが、その上奏文は今に残っていないとい<sup>(47)</sup>う。

同月十八日、閣議を終えた大隈重信が玄洋社社員来島恒喜に爆弾を投げられて重傷を負う事件が起こった。来島は犯行後割腹自殺した。この時はじめ短刀で実行するつもりだったものが爆弾を使用することに変更されたとい<sup>(48)</sup>い、この爆弾の入手先を教えたのが柴四朗であったことを後に玄洋社の頭山満が述懐している。結局、この時入手した爆弾が使用されたのであった。

このような非常手段に訴えてまでも、柴が大隈の条約改正を阻止しようとしたのは何故なのか。その問いに対する答えは同年十一月に刊行された東海散士編『埃及近世史』にみる<sup>(49)</sup>ことができる。同書はムハンマド・アリー<sup>(49)</sup>の時代より書き起こし、アラビー・パシャの「国民党ノ運動」に終わる日本で初めて刊行されたエジプト近代史の叙述である。柴はその緒言（同年十月）で、「欧米人が著述中未ダ埃及近世史ト称スル書アルヲ見ズ、因テ已ムコトヲ得ズ、左ノ諸書及ヒ新聞雑誌等ヲ参考シ、并セテ記者ガ埃及ニ於テ見聞シタル所ヲ蒐輯シテ此書ヲ編セリ。」と述べている。「左ノ諸書」つまり参考文献として二十冊の洋書を掲げている。原書と照合してみると、『埃及近世史』の叙述はこのうち主として Baron De Malortie 著“Egypt”および、SKeay 著“Spoiling the Egyptians”（柴の訳語では『埃及惨状史』）の二書の翻訳によるところが大きいことがわかる。二書の翻訳を基調として所々に「散士」の一人称で柴自身がエジプトで見聞した知見、主としてエジプトの疲弊衰頹の様子が挿入されているので、この書はある意味で『佳人之奇遇』番外編のような趣を呈している。

この『埃及近世史』には谷干城が序文を寄せている。谷もまた洋行中にエジプトの「惨状」を目撃して慨然としたことを述べて、「噫凡庸ノ政治家国力ヲ計ラズ、民情ヲ察セズ、徒ニ己レノ好嗜ニ任セ欧風ニ之レ模擬シ、終ニ沐猴冠タルノ誹リヲ免レザルモノ」と、凡庸の政治家が欧風に模擬して国を誤ることを憂いつつ、柴がエジプト史を説く意を汲んでこの書を読むべきであることを述べている。

東海散士ハ余ガ益友ナリ、余ト同ク各国ニ周遊シ徒ニ之ヲ目ニ見ル而已ナラズ、又能ク之ヲ心ニ視ルモノ、彼ノ目眩シテ而シテ心盲スルノ徒ト何ゾ畜ニ霄壤ノ差ノミナランヤ、先キニ佳人之奇遇ヲ著シ以テ世俗ヲ警醒ス、今ヤ埃及近世史ノ撰アリ、嗚呼散士英仙ノ盛事ヲ語ラズ、却テ敗政亡微ノ埃及ヲ説クモノ其志知ルベシ、彼ノ政局ニ当ル者、月ニ酔ヒ花ニ狂スルノ余暇、此書ヲ繙キ之ヲ目ニ見ズシテ、而シテ心ニ視バ、乃チ内外ノ政務ヲ料理スルニ於テ身自ラ誤ラザルノミナラズ、亦以テ上君ヲ誤リ下民ヲ誤ルノ咎ヲ免ル、ニ庶幾カラン乎

谷は当局者に対してこの書を読み内外の政務について誤ることのないよう要請している。なお、柴は同書第三版附言で「天下読者ヲシテ公平ニ埃及ノ近世ニ鑑ミ奮勵警戒スル所アラシメンガタメ」これを刊行するに至ったと明らかにしている。柴はエジプトの近代史を叙述しながら、それを当時の日本人が直面していた問題に照らし合わせて読むよう読者に求めているのである。ここには当時日本の重要課題であった条約改正案可否の問題を、エジプトの現実を知ること  
 で「奮勵警戒」させようという意図がある。<sup>(52)</sup>『日本』における同書に対する書評はこうした柴の意図をより明確に示すものである。記事はその文章について『佳人之奇遇』に比べれば「雄麗壯快の点」、「華々しき所」は減少しているけれども「沈痛簡切の点」、「実の入りたる所」は増しているという。これは小説と正史との差違にしてまた「数年以来著者か世故の経験と識力の發達とを窺ふに足れり」と述べて、

著者か明平滅土、阿梨か経国の遠図を詳叙して後段、亜馬斯、濟度、威斯明流の弊政を照すの便を予へたるは尤も其の用意の所を見る、外人干渉の由来を推して之を外国模倣者の罪に歸し、其禍機の洲越運河開通の時に發せしを説きたるは当れるか如し、裁判構成、財政、租税、及び農業、商業及び工業の數章に於て干渉の状態を寫して歐人か埃人を遇する宛かも夜叉か餓鬼を呵責するの状あるは殆んど人をして毛髮慄然たらしむ、其宗教、風俗、教育、自治政、行政、居留外人等の章に於いては、埃及人民衰敗の余、山河残破して困頓流離の有様を描きて挿むに著者か實際目撃する所を以てしたるか故に独り黍離々たるの感あるのみならず、慨然として髮豎たしむるものあり（中略）人種の競争、文化の輸入、政治の改革等錯綜出沒して吾人を戒め吾人を發すに足る、独り吾輩の之を読むや他の史伝に対すると同らずして一種異様の感覺を牽起せり、著者深意の在る所其れ此に在らんか

とあり、著者柴の意図を充分にくんだ書評となっている。柴が非常手段に訴えても大隈の条約改正案を阻止しようとした理由がここにある。日本が欧化主義をとる条約改正を行い、エジプトと同様の惨状に陥ってしまうことがあつてはならなかつたのである。柴は『埃及近世史』を世に出すことで急務である条約改正反対の世論を喚起しようとしたのである。

同じ頃、柴は北村三郎（紫山）著『土其機史』附、小亜細亜、波斯、埃及、亞刺比亞、各国史』（博文館、明治二十三年一月刊）に序文を寄せている。柴は「今や亜細亜ノ形勢果シテ如何ゾヤ。土耳其ノ国勢果シテ如何ゾヤ。空シク古英雄ノ雄図ヲ口碑ニ存スルノミ」とトルコの趨勢を嘆き、「嗚呼土耳其帝国ハ、亜細亜ノ藩屏ナリ、土国亡滅セバ、鳥ニ一翼ヲ傷ケ車ニ一輪ヲ壞ルニ異ナラズ。苟モ我が帝国ノ前途ヲ憂ヒ、遠大ノ志ヲ抱クモノ、此管鍵ニ当レル一帝国ノ大勢ヲ詳ニセズシテ可ナランヤ」と結んでゐる。この書もまた『埃及近世史』と同様の意図を以て刊行されたことは明らかである。なお、北村三郎は『佳人之奇遇』五編巻九に「総評」（跋文）を寄せている川崎紫山である。<sup>(53)</sup>

### 3 政治家柴四朗

#### (1) 対外硬

明治二十三年（一八九〇）七月、第一回衆議院議員総選挙が行われた。柴はこの前年から議員となるべく準備をしてきたのであり地元の期待も高かったようであるが、結局この時立候補はしなかつた。<sup>(54)</sup>これは同じ会津の山川浩と競合することを避けたためである。このいきさつは、柴が当時の心境を述べた書簡が掲載された『日本』紙上で知ることができ<sup>(55)</sup>。記事によれば、会津協会と独立倶楽部が合同した会津倶楽部においては、協会派は柴を独立倶楽部派は山川浩を総選挙に推そうとして終に議論合わず、協会派の人々が出京して柴に承諾を求めたところ、柴は「一旦同主義の故を以て相合したる者か内相闘くは為すに忍ひざる所なりとて、断然辞退して山川氏に之を譲りたり」と告げたとあり、続けて柴が協会派の有志に与えた書簡を掲載している。そこで柴は、「自党小分の弊は常に敵党の乗する所となる」と述べて、以前我が地方党派が分裂した際、「争闘の弊、殖産教育に及び、利用厚生の途、人材養成の方、一時政熱の為に其進歩を障害せられ、我地方将来の幸福將に破壊せられんとするの兆」があつたと説き、今日の政治情勢および地方の利害

を鑑みれば「僕は山川氏と候補者の競争を為さざるを以て至当とす、故に僕は山川氏にして僕と同主義を奉し国事に周旋する間は誠心誠意譲る所あらん」と述べている。だが、このような事情があったにもかかわらず、選挙後に「柴四朗落選」という選挙結果を報じた新聞記事が出たらしい。『日本』には次のような記事が掲載されている。<sup>(56)</sup>

柴四朗氏は山川浩氏と福島県下に候補を争ひ、山口千代作氏の為に何れも敗を取りたりなど、一二の新聞に見えたるは事情を知らぬのか、或は知りて故さらにする流言なるへし、柴氏は一たび候補を辞せしより、毫も候補者なるに意なく、而して今回当撰したる山口千代作氏は柴氏と同じく会津協会員の一人なるにても之を知るへく、又曩に本紙に掲載せし柴氏か書面は即ち山口氏等に送りしものにて、之にても亦た知るを得へし

以上の記事により、柴は第一回総選挙では立候補を見合わせたことは明らかである。

同年七月、富田鉄之助、大島貞益、谷千城、陸羯南らが発起人となり国家経済会が設立された。柴もこれに属すが、これも日本経済会と同様に保護主義を考究し推進するために設立された。

この頃、柴は小田切万寿之助、犬養毅、広沢安任と共に江南哲夫著『朝鮮財政論』（慶雲堂、明治二十八年三月刊）の評者となっている。<sup>(57)</sup>この書には「大清光緒十有六年」（明治二十三年）八月の袁世凱による序文がある。それによれば同書を袁世凱に示し序文を求めたのは「日本柴君」すなわち柴四朗だとある。したがって、この時、柴が袁世凱と会っていることは確かであるが、筆者はこの経緯を未だ明らかにし得ていない。江南は自序で次のように述べる。西欧列強によるアジアへの侵略が続いている「弱肉強食」の世界にあつて、朝鮮の「盛衰興亡」は「我東亜各国之運命」に大いに関係ある所である。故に朝鮮人士のために「越俎之嫌」を避けることなくこの書を著したと述べている。同書は章毎に江南による漢文の本文の後に各評者による漢文評が付けられている。柴は広沢安任の跋文の後に「総評」を書き「経泰西之学理、緯近世之事实、要之有詳覈頗可考者矣」と述べて、「美国経済学士東海散士柴四朗」と署名している。序文

を袁世凱に依頼し、一人「総評」を書いていることから、同書に対する柴の思い入れの強さをうかがうことができる。従来いわれてきたように、柴四朗は経済学士としての活動があまりないとする記述は正されるべきであろう。<sup>(58)</sup>

同二十四年七月七日、東邦協会（会頭副島種臣）が創立された。柴は創立当初より会員となる。「東邦協会設置趣旨」〔『東邦協会報告』一号、明治二十四年五月〕には「東邦の諸邦、南洋の諸島、凡そ我が帝国近隣の勢状を詳かにして之を国人に慣れしむる」ために設立され、その目的は「小ハ以て移住貿易航海の業に參稽の材料を与へ、大は以て域内の經綸及び国家王道の実践に万一の補益を為し、終に東洋人種全体の将来に向て木鐸たるの端を啓くこと」であるとしている。同会の事業には、東洋諸邦及び南洋諸島に関する地理、商況、兵制、殖民、国交、近世史、統計の講究と、國際法及び欧米各国の外交政策ならびに殖民貿易の講究を掲げている。柴は評議員となつてこれに深く関わつていく。この頃執筆されたとみられる『佳人之奇遇』五編卷九卷十は、四編卷八からほぼ三年が経過して刊行されている。もつとも柴は卷九自序で、原稿紛失と大津事件がこの編の刊行を遅らせたと説明しているが、ここではこの年に刊行された意義を重視しておきたい。

柴が同書初編（明治十八年刊）の舞台としたのは、明治十五年春、主人公東海散士はアメリカ留学中であつた。そこで日本のアジア盟主論を掲げたのであるが、それは刊行現時の同十八年の世界情勢を意識して書かれたものであつた。五編（明治二十四年刊）卷九もやはり明治十五年から始まるが、その卷末は同十七年十二月、主人公散士帰国時の描写となる。続く卷十は同十八年一月以降、散士帰国後の日本国内が舞台であり散士がアジアの問題を盛んに議論し奔走する様が描かれる。つまり、この五編に至つて舞台は急転換しているのである（表1参照）。ここに柴の意図が感じられる。この編で議論されるのは柴のアジア連衡論である。その詳細は別稿に譲るが、柴のアジア連衡論は、その一面に「反脱亜」を唱えてアジアを率いて日本が盟主となつてアジア連衡の実現を構想するという積極的な面をみせながら、実

は日本一国では列強に対峙し得ないとの現実的判断からその連衡を求めているに過ぎないという極めて「脱亜」的な自国本位のものであった。日本がアジアの盟主となるという思想は初編から一貫しているが、盟主日本がアジアを連衡し、柴が構想するのは次のような世界である。

東洋列国ヲ連衡シ、印度ヲ助ケテ独立タラシメ、埃及、馬島ヲシテ英仏ノ干渉ヲ絶タシメ、朝鮮ノ独立ヲ保護シ、清国ト連合シテ、速ク露人ヲ退ケ、亜細亞洲中欧人ノ鼻息ヲ納ルナカラシメ、屹然宇内ヲ三分シ亜欧米鼎立シ、武ヲ偃セ道ニ仗リ人生安樂四海平和ノ大業ノ基ヲ建ツル（『佳人之奇遇』五編卷九）

すなわち柴が最終的に目指すのは、亜・欧・米が天下を三分し鼎立する世界なのである。これが東邦協会の設立趣旨にあるところの「東洋人種全体の将来に向けて木鐸たるの端を啓く」べき柴が構想するアジアの将来の姿なのである。柴がこの年に『佳人之奇遇』続編を著わし世に出した意図は、この持論を世に広めることにこそあったのである。

同二十五年二月十五日の第二回衆議院議員総選挙では、柴は福島県第四区から無所属で立候補し当選した。この時、『佳人之奇遇』巻八を自身の「政治上の意見」と述べたことは既に述べた通りである。

同年十一月、楠本正隆、河島醇等によって同盟倶楽部が組織されるとこれに柴も属した。これは第三議會での選挙干渉上奏案賛成の独立倶楽部員の一部と、当時「独立民党」と称した無所属議員とが合同した議員倶楽部であり、自由党改進黨とともに民党連合派として活動する。条約勵行と対等条約の締結を主眼とした。柴は河島醇とともに外交政務調査を分担した。

同二十六年三月、榎本武揚によって海外への移民殖民政策を推進実行するため設立された殖民協会の評議員となった。同年十月には、鈴木力（天眼）主筆の新聞『二六新報』の社友となった。<sup>(39)</sup>柴は『二六新報』に「故須多因博士の条約改正論」を掲載した。<sup>(40)</sup>この記事は先に述べたウィーンでのシュタイン講義を記録した、柴四朗「筆記」中の明治十九年

八月十二日の講義録によつてゐる。この日の講義では条約改正問題について、シユタインが重要な提言を柴に与えたのである。既に述べたように柴のみが聴講した同日の講義は、谷が帰国後に提出した条約改正に関する意見書の内容に大きな影響を及ぼしている。この日シユタインが「条約改正ハ上天皇陛下ヨリ下人民ニ到ルマテ一致結合シテ輿論ヲ世界ノ公衆ニ訴へる」と提言すると、柴は『佳人之奇遇』刊行時の自身の経験をまじえて政府の言論弾圧の実態を語り、日本では挙国一致の世論形成など「到底望ムベキモノニ非ルヘシ」と答えた。これを聞いたシユタインは「予日本政府ノ外交政略ノ何ノ辺ニアルヲ知ル能ハサルナリト、輿論ヲ庄シ怯弱手段ヲ主唱スル諸公ハ何人ソヤ」と述べたことを記して記事を終えている。柴がこの講義録を『二六新報』に掲載した意味について考えておきたい。

同年末、第五議會において「(対外)硬六派」といわれる党派連合が成立した。これは、国民協会、改進黨、同盟俱樂部(柴属す)、政務調査会、同志俱樂部、東洋自由党の六派の連合で三百の議席の過半数を占める勢力であつた。<sup>(6)</sup> 二月十五日の千島艦事件は領事裁判における日本の不利を露呈した。これは「国権を傷つけるもの」として鳩山和夫、柴四朗等が上奏案を提出した。翌二十七年になると、「硬六派」は「条約勵行」、「対外硬」、「対外的強硬主義」をスローガンとして用いるようになる。柴がこの政治勢力に積極的に関わつていくことと、この時シユタインの条約改正問題の講義を持ち出すこととは無関係ではない。なぜなら柴はこの議論を公表することで、シユタインが提言したように、「対外硬」で「挙国一致体制」をとることの必然性を世に訴えているからである。

同二十七年一月、柴は中村弥六と同盟政社を結成した。その頃、自由党脱党組が組織した同志俱樂部が同志政社となった。両政社は政社の連合と見なされ告発を受けたが連合の証拠なしで無罪となった。三月一日、柴は第三回衆議院議員総選挙で当選した。総選挙後、両政社の当選議員が公同俱樂部という交渉団体を作り、五月三日に立憲革新党が結成された。

同年三月、上海で金玉均が暗殺された。その記事を報道する新聞各紙には、金玉均や朴泳孝と親しい日本人として柴四朗の名が屢々あがっている。<sup>(62)</sup>金の遺体引取りの計画が起こった時や、朴が監禁事件に問われた際その釈放のため奔走している。

柴は同年六月、多忙を理由に『二六新報』社友を辞した。<sup>(63)</sup>当時、同盟倶楽部所属の柴が同志倶楽部との提携に連日奔走していること等を報じる同紙記事によってその動向が明らかとなるがかなり多忙である。政治活動に多忙であったということがこの時期全く著作が見られなくなることの理由のひとつである。

## (2) 朝鮮問題

日清戦争直前に「第二の天佑侠」と呼ばれる民間志士の拳兵謀議が起こった。これに柴も関係している。同年六月、福本誠(日南)が東邦協会の派遣員として朝鮮国に渡ったが、日清両軍が対峙している状況をみて朝鮮政府クーデター計画を謀り始めた。帰国後の福本は第六議会以降、朝鮮問題を取り上げていた硬六派勢力にこの謀議を持ちかけた。福本はこの謀議に加わった人物として、高橋健三、頭山満、佐々友房、陸羯南、古荘嘉門、田中賢道、柴四朗、国友重章、朴泳孝等をあげている。実行部隊の総大将は荒尾精と決まり、朴泳孝も同行する計画であったというが、七月二十三日、日本軍が直接朝鮮王宮を占領し、大院君政権を樹立、さらに日清開戦となったので立ち消えとなった。<sup>(64)</sup>

同年八月、日清開戦となった。柴は同年九月一日の第四回衆議院議員総選挙で当選するとすぐに朝鮮国へ渡った。これは開化親日派政権樹立のため朴泳孝を支援するためであった(十月帰国)。

翌二十八年四月、日清戦争が終結し講和条約が結ばれるも、四月二十三日、三国干渉をうけて遼東半島還付となる。三国干渉に対し対外硬運動を展開するため積極的に動いたのは、中央政社、改進黨、立憲革新党(柴属す)、中国進歩

党であつた。日清戦争後はじめての議會となつた第九議會において立憲革新党を含む対外硬派は、三国干渉・遼東半島還付を政府外交の失敗であると主唱し、政府問責運動を展開した。

五月下旬に柴は谷、三浦等の意を帯びて佐々友房と共に朝鮮国へ渡つた。戦後の朝鮮国政情を視察して、帰国して新内閣内務大臣となつた朴泳孝に面会している（六月下旬帰国）。これは三国干渉後、当時の朝鮮公使井上馨が朴泳孝内閣と意志疎通ができず、ロシアがその隙に乗じようとする時にあたり、「其間ヲ調和」するためであつたといふ。<sup>(65)</sup>

同年九月、日本政府は井上馨に代わつて三浦梧楼を朝鮮国駐在公使として派遣した。朝鮮国の閔妃一族は日清戦争の敗戦によつて朝鮮での勢力を弱めた清国に代わつて、三国干渉で台頭してきたロシアの力を頼り排日政策を進めていた。三浦を公使として総理大臣伊藤博文に推薦したのは谷干城であつた。同じく谷の推薦により柴は三浦の顧問の一人として随行した。<sup>(66)</sup> 三国干渉により、日本の朝鮮政策は独立を前面に出しながらも従来の方針を後退させていた。ロシアをはげしく意識しながら朝鮮に対しては井上馨の態度は、朝鮮公使在任当時の西園寺外務大臣宛電報にも見えるが、これに柴四朗の名前が出てくる。<sup>(67)</sup> 井上は、「目今露国へ対シ悪感情ヲ起サシメサルコト」が大切で、「今後一層新紙ノ取締ヲ嚴ニシ外交ニ関スル記事ハ特ニ謹慎ヲ加ヘシムルコトニ致シ、対韓将来ノ法略ハ柴、佐々等ニ内話シ全ク同意シ居ルニ付、野村内務大臣へ御話ノ上、右兩人ヲシテ新聞記者ニ説諭ヲナサシムルコト便宜ナラン、猶ホ過ル二十五日内謁見ヲナシ、二時ヨリ夜ニ入り九時頃マデ諄々ト事情ヲ君主王妃ヨリ細密ニ聞取り、余程宜シク疑惑モ氷解スルナラン、就テハ王妃ノコトヲ称賛シテモ悪評下サ、ルヨウ、最モ御注意ヲ乞フコト、又佐々、柴等ニ尽力セシムル手段最モ必要ナリ」とある。つまりこれ以前に井上、柴、佐々の三者は「対韓将来の法略」を「内話」をする機会を持ち、そこで柴等は「新聞記者ニ説諭」するといふ意味で日本国内の世論操作を行う役割を担つたものとみられる。

既に述べたようにこの頃に柴の著述は見られないが、柴が三浦の顧問として朝鮮国へ出発する前に、芝公園紅葉館で

催された宴席で述べた送別の辞を掲載した新聞記事がある。<sup>(88)</sup> 柴は朝鮮に渡る前に次のように述べた。

外交は強硬にして永久ならざる可からず、一定の方針を有せざる可からず、而して其方針は自働的なるべし、他働的なる可からず、或る一派の人の唱ふる他働的方針臨機応変的政策は余の欲せざる所なり、今後我国は宜しく朝鮮をして真個の獨立国たらしむるか、保護国たらしむべきか、強国の何れかに結托して他の強国に当るべきか等につき永久不変の方針を確定し、之によりて進退せざる可からず、此の事は今日の尤も緊急に堪ざる所なれば、内国にある我党諸君も此点に就き常に充分の御考慮を煩はされし

これより先、三浦梧楼は朝鮮公使赴任にあたって政府に対韓政策三案すなわち「朝鮮は独立させるか、併呑するか、日露共同の支配にするか」を示し、政府の指示を求めて「意見書」を出したという。しかし沙汰がないので一旦公使就任を断ったところ、山県から「申し出の三大政策は事重大にして最も熟慮を要するから、いずれ何らかの決定を示すべきに付き、一日も速やかに渡韓をしてくれとの事である。そこで我輩は政府無方針のままに渡韓する以上は、臨機応変自分で自由にやるの他はないと決心したのである。」と三浦は後日述べている。<sup>(89)</sup> 三浦のいう「意見書」とは後に新聞、雑誌記事、議会演説において柴が公表するものである。いうまでもなくこれは柴の送別の辞と同様の内容である。前に述べた条約改正反対上奏文の時と同様、この三浦の「意見書」にも柴が深く関わっているものとみられる。赴任前に既に三浦と柴の「自働的方針」は一致していたのであろう。

閔妃暗殺事件（乙未事変）が起こったのは十月八日である。岡本柳之助等に迎えられた大院君が王宮に入り、大院君の執政で親日派の内閣が結成されたが、その時、宮中に乱入した集団によって閔妃が殺され死体が焼かれた。宮中において外国人の目撃者があり、八日朝、王宮から引き上げてくる日本人の集団が京城の一般人に目撃されていることから、日本人が事件に関わっていることが明らかとなり国際的に非難の対象となった。同月十日、日本政府は事変調査のため

小村寿太郎政務局長を朝鮮に派遣し、十七日に三浦を罷免して小村を弁理公使とした。翌十八日、事件に係したとされる日本人に退韓命令が出された。退韓者は帰国後、「凶徒囂集謀殺罪」により逮捕され、広島地方裁判所で審問を受けた後、広島監獄に投獄された。柴も同様に獄中の身となった。

他国人が一国の王妃を暗殺したというこの事件は当時の国際的な大問題であり、当事者達の事件後の回想録にも正確な事實は語られておらず、その真相を明確に知ることはできない。けれども、この事件に関わる記録を調べていくと、柴は間違いなく事件に深く関わっていたことが明らかである。例えば、事件直後に秘密文書として外務大臣に報告された内田定槌領事報告には、今回の事変は「大院君及三浦公使ノ共謀ニ基キ多勢ノ人々王宮内ニ乱入シ終ニ王妃ヲ始メ其他ノ人々ヲ殺戮スルニ至リタル次第」であるが、「日本人ガ之ニ関係スルニ至リタルハ皆直接又ハ間接ニ三浦公使ノ教唆ニ基クモノ」と三浦を事件の首謀者と断定し、事件に関与した人物を挙げる中で「柴四郎ハ三浦公使ノ股肱トナリ総テノ計画ニ参与シ旁ラ壯士輩ノ操縦ニ従事シタルモノト認メラレ候」と、柴も三浦と同じく事件の中核にいたことを指摘している。さらに、事後処理を柴の旅宿で行い、退韓処分について日本での断罪をおそれて不安を抱く壯士たちをとりまとめ説得する役割を柴が果たしたことも判明する。<sup>(7)</sup>

この時、『日本』は広島に記者を派遣し、「広島通信」、「朝鮮事件広島日記」と題する記事で取調べの様子や退韓者に対する取り扱い等を連日報道した。同年十月三十一日の記事「柴氏と刑法」には、獄中の柴が「刑法治罪法」の差し入れを申し出て「反覆熟視」していることを報じている。<sup>(8)</sup>

柴は同年十二月十四日に保釈された。翌二十九年一月二十日、広島地方裁判所において三浦以下一同は証拠不十分で免訴となる。「予審終結決定書」には退韓者四十八名の名が列挙され、岡本柳之助に次ぐ二番目に柴四朗の名がある。

柴は「本案被告事件ニ関係セリト認ムベキ証憑十分ナラズ」として事件そのものに無関係となっている。これより先、

一月七日に議会展席のため東京へ帰っていた柴は、これ以後精力的に自ら事件の「真相」を報道していくのである。<sup>(73)</sup>

まず柴は国友重章と連名で「八日事変の原因」を書いた。これは「日本」をはじめ新聞各紙に掲載された。<sup>(74)</sup> 関妃暗殺の理由を「某国」すなわちロシアが朝鮮へ勢力を伸ばしつつあることへの対処であったと述べて、「朝鮮の独立帝国の面目及び利益、東洋の平和を挙げて之を他人の蹂躪に帰せざるべからず、左れば此危機一髪の際に際し当局の外交官が其身を犠牲にして匡済手段を執るハ万已むを得ざるに出でたるものと信ずるなり」と結んでいる。<sup>(75)</sup>

二月二十五日、柴は第九回帝国議会で今回の事変に対する内閣の措置に対し弾劾演説を行った。<sup>(76)</sup> 柴は、三浦公使が「従前ノ方針ニ依ツテ信スル所ヲ政策トシテ行」った結果事変に至ったと述べてその正当性を主張し、事変後の日本政府の対処を非難した。また日本の朝鮮における勢力を後退させ、利権を減少させ、ロシアの朝鮮への勢力を増大させる結果を招いたのは前任井上公使の対韓政策の失策によると述べた。そして、公使就任前の三浦の「意見書」ならびに事変後に三浦が「我勢力を維持し当初の目的を達する上に就てハ実に不得止、此に出でたる」と述べた総理大臣伊藤宛書簡を朗読し公表した。

三月五日発行の『日本人』誌上に柴は「対韓私見」を寄稿した。<sup>(76)</sup> これは先の議会展説の内容を改めて文章化したもので、記事の末尾には演説で引用した三浦の建議と書簡が添付されている。議会の場だけでなく世間一般に公表するという意図のもとに執筆したものであるう。

この事件に対する柴の言論はさらに続いた。翌三十年の七月から十月にかけて、五編卷十（明治二十四年刊）から六年もの間途絶えていた『佳人之奇遇』続編（六編卷十一から八編卷十六まで）を一挙に刊行したのである。六編卷十一は明治十九年の欧米視察出発から始まる。欧米視察の描写が続き、八編卷十五に至って帰国後の同二十年条約改正反対運動の頃を描いている。八編卷十六はその後明治二十九年までがその舞台となり、これまで小説の舞台と刊行年に時差

があつたものが一気に現時に迫るのである（表1参照）。最終巻十六はそのほとんどを朝鮮関係の議論が占め、十月八日事変に至るまでの描写は前年から柴自身が新聞、雑誌で繰り返し述べてきた論理を踏襲している。なお、巻十六は広島獄中に繋がれた主人公散士の夢に金玉均等が現れて上海で殺された次第を語り、これに驚き目覚めた散士が暗闇の中で巡視する警官の靴音と剣の響きを聞くところでその物語は終結する。前年から柴が公表してきた閔妃暗殺事件の「真相」をさらに一般に広めるべく書かれたものであることは明らかである。前と同様に柴は『佳人之奇遇』の高名を利用したのである。

先に井上馨は柴四朗を世論操作に利用する旨を日本政府に申し送っていたが、ここでは柴自ら世論操作を行わんとする意図があるように見える。柴は著名人である自身の最も世間一般に知られている代表作の続編で、自ら関わった事件を語るという効果的な手段でその「真相」を世に公表したのであった。

### (3) 『日露戦争羽川六郎』

明治二十九年（一八九六）三月一日、立憲改進黨、立憲革新党（柴属す）、大手俱樂部、帝国財政革新会、中国進歩党の五党派および無所属議員の一部が合同して進歩党を結成し、代議士総数の三分の一を占める勢力となった。進歩党に結集したのは、日清戦争前に「現行条約勵行」、「対清強硬」を唱えて運動し、戦後再び三国干渉、朝鮮問題等の対外問題を主要争点として政府外交の失敗を問責する運動を展開した人々であった。党首は置かず、犬養毅・尾崎行雄、大東義徹・柴四朗・長谷場純孝の五人の総務委員が党指導部となった。柴は党勢拡張のため三月に福島で進歩党支部発会式を挙行した。さらに七月には鈴木重遠、高田早苗、工藤行幹等とともに東北大遊説を行っている。

同年九月、松方・大隈の連立内閣が成立し、事実上進歩党首領である大隈が外相、高橋健三が内閣書記官長、神鞭知

常が法制局長官となる等、政府と進歩党は提携に進み、進歩党は正式に内閣の政綱が党の方針と大差ないことを表明した。柴は先の四名とともに政務委員となった。進歩党は新聞紙条例の改正で言論取締を緩和させる等、内閣の政策形成にある程度参加することに成功したが、十月に雑誌『二十六世紀』事件が起こったのをはじめに進歩党側の意見が圧殺される事件が続いた。第十一議會を前に内閣が地租増徴の方針を決めたことを契機として、十月三十一日、進歩党常議員会は内閣と提携断絶を宣言するに至った。柴は政務委員を代表し「今日提携破棄の已むべからざる所以」を述べ委員辞職の意を表明した。十一月六日、大隈が辞職すると進歩党官吏は連袂辞職した。政府は進歩党の代わりに自由党と提携しようとしたが失敗、十二月二十五日、議會解散となった。

この年十一月、新領土台湾の開発を目的とした台湾協會が創立された。柴はその創立委員である。

翌三十一年一月、第三次伊藤内閣が成立。三月十五日、柴は第五回衆議院議員総選挙で当選した。第十二議會は、進歩党（柴属す）と自由党が提携して地租増徴案を否決し議會は解散した。六月二十二日、進歩・自由両党が合同して憲政党を結成した。柴は創立委員の一人である。六月二十五日に第三次伊藤内閣は総辞職し、六月三十日、総理大臣大隈重信のもとに初の政党内閣（隈板内閣）が成立した。農商務大臣大石正己のもと次官に就任した柴は八月十日の第六回衆議院議員総選挙でも当選した。しかしやがて憲政党は分裂し、新たに憲政党（旧自由党）と憲政本党（旧進歩党、柴属す）が結成された。十一月八日、第二次山県内閣が成立した。

同月、東亜会と同文会が合同して近衛篤磨を首領に東亜同文会が設立された。<sup>(78)</sup> 東亜同文会の趣意書には日清両国の「同文同種」、「唇齒輔車」が唱えられた。近衛篤磨は当時貴族院議長、薩長藩閥に対し批判的であり、貴族院で三曜会という会派を率いて、谷干城等の懇話会とともに政府批判運動を展開していた人物である。頭山満は後年、当時抱いていた近衛内閣構想について、「近衛内閣成立の暁は、柴四朗、佐々友房、神鞭知常、根津一の外に予も閣僚の一員とし

て、道義的の国家経綸を行ひ東亜の天地を廓清する為めに、此等の人物に依つて東亜百年の大計を定むる為め先づ征露の偉業を完成せねばならぬと云ふ意気込であつた。」と語っている。<sup>(79)</sup>

第二次山県内閣が日清戦後の財政膨張の対策として地租増徴を決定すると、柴は徹底してこれに反対し、同三十一年末から翌年にかけて谷干城、三浦梧楼等と地租増徴反対同盟会を結成し全国的に運動を展開した。<sup>(80)</sup>

同三十三年、義和団の乱を契機として東アジアをめぐる国際関係、日露関係が緊迫化した。九月、近衛篤磨は、ロシアの野心に対抗するために「支那保全論」を主張して国民同盟会を組織した。柴は、佐々友房、大石正己、犬養毅、神鞭知常等とこれに属した。ロシアに対する対外硬主義の発揚である国民同盟会運動は東亜同文会の有志を中核とする、国内外の新たな状況に対応する対外硬運動であつた。<sup>(81)</sup>

同月下旬、柴は竹内正志とともに清国へ赴き、北清事変後の実況を視察して十一月に帰国した。十二月二十日、新富座で開催された国民同盟会中央大会でこの時の見聞を披露して「支那保全論」を主張している。<sup>(82)</sup>

同三十五年八月十日、第七回衆議院議員総選挙当選。十二月二十八日、議會解散。翌三十六年三月一日の第八回衆議院議員総選挙では柴は初めて落選した。これまでの会津地方ではなく若松市から立候補したところ選挙干渉を受けたためである。しかしながら、この落選は柴に『日露戦争羽川六郎』(有朋館、明治三十六年十一月刊)というもうひとつの「政治小説」を執筆させる時間を与えた。この書物は今日では一般にあまり知られていないが、主人公の設定は異なるものの『佳人之奇遇』の続編と位置づけることができる内容を持つものである。<sup>(83)</sup>

主人公はやはり旧会津藩士で名を羽川六郎といい、軍用潜行艇や軍用飛行機の開発に携わる研究をしている人物である。序文には、「露国の東方計略は、我が日本の国是と全く相容れず。今や満韓問題は、一髮千斤を維くの危機に迫り、將に建國以来未曾有の国難たらんとす。会々羽川六郎と称する者、自伝を草して刪潤を散士に請ふ。文章函弁、解し難

きものありと雖、能く日露交渉の梗概を悉し、現状を揣摩し、未来を理想する所、大に予が意に適するものあり。即ち百忙中痛く添削を加へて、此に剗削に附せしむ」とあるが、羽川六郎の経歴に柴自身の体験を取り混ぜていることから、当時の同書広告文には「小説にして小説にあらざり、実伝にして実伝にあらざり」と紹介されている<sup>(84)</sup>。

全体の構成は三部に分けることができる。第一部は羽川六郎の生い立ちから北清事変までを描き小説風である。第二部はそれ以後日露開戦まで、この部分は柴の体験を基にした事実である。第三部は日露開戦後、日本が勝利し東洋永遠の平和を確保し、さらに日英米の三国が主唱して万国平和会議を開き、世界平和のための発議をして終わるといふ「未来記」で終結する。

明治三十七年二月の日露開戦以前に、日露両国間の将来を「未来記」という形で著したものは、モリス著・大町桂月訳『東洋之大波乱日露戦争未来記』（博文館、明治三十一年九月刊）をはじめとしていくつかあった<sup>(85)</sup>。その中でも『日露戦争羽川六郎』は現実の開戦が間近に迫った時期に刊行されている。他の未来記と比べた時、同書の特徴は日露開戦までの前史が詳細に語られ開戦に至るまでに全体の四分の三が費やされていることにあり、なおかつその前史部分がほぼ柴の実録であるという点にある。『日本』の同書に対する書評中に「全編の結構は、彼佳人之奇遇と同じく自叙伝にして暗に自家を指したる者なるは勿論」とあるように主人公羽川六郎（柴四朗）であることは当時の読者にとって自明のことであつたのだらう<sup>(86)</sup>。柳田泉は文学研究の立場からこの書を評して「六郎を一時行衛不明にさせたのは、この間に、日露交渉を直写しようという目論見があつたからであるが、然しあまりにそこに経世家意識が露骨に出ていて、小説的興味がなく、甚だ殺風景なものになつてゐる。」と述べている<sup>(87)</sup>。しかしそこにこそ柴の意図があると見るべきである。柳田はまた「この作の目的たる憎露感情を煽動するという点で相当の効果を収めたのではないか。」とも述べているが、柴の真に意図するところは、やはり当時柴がどのような政治活動を行つていたかに照らして考えるべきである。このこ

とに關して、柴と日露戦争の関わりを示した次のような史料がある。<sup>(88)</sup>

(日露開戦前) 我国官民中、恐露病ニ罹リ、非戦論ヲ主張スルモノ其勢力闊族政党及富豪間ニ蟠マリシヲ以テ、真ニ国論ヲ主戦ニ一致セシムルニハ大ニ考慮ヲ費ヤサザル可カラザルナリ、是レ柴君ガ対露同志会ヲ組織シ、之レガ全権委員トナリテ、同志ヲ代表シ以テ当局及有志ノ間ニ活躍セラレタル所以ニシテ、又一方ハ羽川六郎ト題スル、日露戦争未來記ヲ著述シテ、露国政界ノ内情及陸海軍ノ内情ヲ剔抉シテ、露国ヲ解剖シ露国ノ何物タル、露国ノ恐れ、二足ラザル事、列国ノ態度亦憂フルニ足ラザル事、及千載一遇開戦ノ時機逸ス可ラザルノ理由ヲ国民ニ警告セラレタル所以ナリ、此書端ナクモ歐洲新聞ニ翻譯掲載セラレタルヲ以テ、露国官民ノ心胆ヲ寒カラシメタリト云フ

対露同志会とは、明治三十六年八月九日に結成された対露強硬論を主張する政治団体である。柴は「対外硬派聯合委員」となり対露同志会創立に尽力しその活動に奔走した。<sup>(89)</sup>柴が『日露戦争羽川六郎』を刊行したのは、この対露同志会の活動の一環であったとみるべきなのである。同書中には「対露の国論」の章があり、主戦論と非戦論を併記して非戦論の否なる事を述べている。柴は「国論ヲ主戦ニ一致」させるためにこの書を著わし世に出したのである。

また同書の結末にも注目しておかねばならない。日・英・米の三国の提唱による万国平和会議の發議を以て終わるといふ結末は、先に述べた柴の理想とする「亜欧米鼎立」の世界の実現そのものである。柴は終始一貫してこの世界の實現を志向していたことがここで明らかとなる。

第十八議會は同三十六年十二月に召集されたが、議長河野広中の弾劾的奉答文の問題で即日解散した。翌三十七年三月一日の第九回衆議院議員総選挙では、柴は若松市から立候補し今度は当選した。

同三十七年二月、日露開戦となった。柴はこの時、「満州方面ニ數回視察」を果たし、「且ツ樺太克復ニ熱心ナルヲ以テ其素志ヲ当局ニ告ゲ、樺太征討軍ノ発スルヤ、柴君ハ長谷場純孝氏ト二人、陸軍ヨリ樺太調査ノ命ヲ受ケ従軍」したといふ。<sup>(90)</sup>柴はこの功により勲四等に叙せられた。

同三十九年、憲政本党に内紛が起り、柴は党の現状に対する不満から党を脱し、前年三十八年十二月に、帝国党、甲辰俱樂部、自由党その他の合同により結成されていた大同俱樂部に入った。同四十一年五月十五日、第十回衆議院議員総選挙では再び若松市で当選した。同四十三年三月、大同俱樂部（柴属す）と戊申俱樂部、無所属の一部が合同して結成された中央俱樂部において柴は常任委員となった。

#### (4) 韓国併合

明治四十四年（一九一）三月八日、帝国議会において「明治四十三年勅令第三二六号（韓国併合について）事後承諾を求める件」が上程された。これに対し柴は「今日ノ併合ヲ得マシタノハ、本員等ハ実ニ欣喜措クトコロヲ知ラズシテ、此今日ノ併合ノ日ヲ以テ祝日トマデモ致シタイト考ヘル位デアル」と述べて賛成演説を行った。<sup>(91)</sup>この演説中で、柴は一昨年すなわち同四十二年の暮れにロシア、満州、朝鮮の視察に赴き、ウラジオストックおよびハルビンにおいて危険分子の存在を確認したこと、朝鮮では国情が数年前より著しく変化し日本へ対し「反抗ノ氣勢」を高めていたことを実見し、帰国後直ちに当局者へ「早く処置スルコトヲ忠言」したことを明らかにしている。<sup>(92)</sup>そして、次のように述べる。

日本裁判官ガ嚴肅ニ裁判シ、並ニ収税吏ガ今日マデ朝鮮人ガ賄賂ヲ以テ裁判ヲ左右シ、収税吏ト云フモノモ半バハ其私囊ヲ肥スト云フコトガアツタノヲ、之ヲ日本ノ役人直ニ裁判ト云フモノハ公平デアル、税ト云フモノヲ納メル者ハ必ズ吾々ノ安寧幸福ノタメニ納メルモノデアルト云フコトヲ彼等ガ理解シマシタナラバ、朝鮮人ヲ同化スルコトハ敢テ難キコトデナイト思フノデアリマス

この発言に至り、その著書『佳人之奇遇』で小国の自由と独立を標榜していた柴がいつしかその思想を変化させてしまったという議論があるがそうではない。<sup>(93)</sup>また「民族の平等を唱え、異文化の尊重を原則としていた散士が日清戦争に

おける勝利を境に日本中心主義に急傾斜」したのではない。<sup>(94)</sup>なぜなら柴は「同志として連帯感」を持って小国を見ていたわけではなかったからである。そのことは同じ演説中の次の発言に明らかである。朝鮮総督の施政の要点を挙げるにはまだ時間が必要であると述べた時に、「現ニ英吉利ノ「クローマー」卿ガ埃及ニ臨ンデ施政ヲ挙ゲマシテ非常ナ名譽ヲ博サレタノハ、何年掛リマシタカト云フト十数年ノ歳月ヲ費シタノデアリマス」と、エジプトにおけるイギリスの植民地行政官クローマー (Evelyn Baring, 1st Earl of Cromer 一八四一—一九一七) の統治を挙げているのである。したがって先に述べた『埃及近世史』はエジプトへの共感をともなうて書かれたものでは決してないこともここで明らかとなる。このことは第一章第一節で指摘した、柴には敗者への共鳴、共感がみられないということと結びつくのである。

また、『日露戦争羽川六郎』の終末には次のような「未来記」の叙述がある。万国平和会議と同時に、シベリア沿岸州に発見された金鉱、樺太の炭坑、満洲に発見された大鉱山のいずれもが好成績を示し日本経済は発展し、「而して我が人民の陸続朝鮮満洲及び沿岸州に移住する者甚だ多からんとするの状況に至れり」と述べて、これが我が国の「円満の結果」であるという。ここには柴の殖民論理が透けて見えていよう。

同四十四年、清国で辛亥革命が起ると、柴は衆議院から「清国動乱觀察委員」として挙げられて清国へ赴いた。<sup>(95)</sup>

同四十五年五月十五日の第十一回衆議院議員総選挙では若松市で二度目の落選となった。柴はこの落選の後は『世界盲人列伝』を執筆していたとみられる。<sup>(96)</sup>

大正四年三月二十五日、大隈内閣のもと第十二回衆議院議員総選挙では加藤高明の立憲同志会(大正二年十二月結成)から立候補し当選した。外務大臣石井菊次郎のもと外務参政官に就任した柴は当時、第二次滿蒙建国運動が計画された時、これに協力している。<sup>(97)</sup>

同六年四月二十日、第十三回衆議院議員総選挙に憲政会（同五年十月結成）から立候補し一旦は落選したが、選挙無効の裁判を起し再選挙の結果当選した。<sup>(98)</sup>これを最後に次の第十四回総選挙には出馬しなかったようである。

大正十一年（一九二二）九月二十五日、柴四朗は熱海の別荘で脳溢血により没した。享年七十一歳であった。

### おわりに

柴四朗はその生涯において『佳人之奇遇』、『埃及近世史』、『日露戦争羽川六郎』という異彩を放つ三部作を著わした。柴は当時一世を風靡した「東海散士」の文名を利用しながら、自らの政治思想を広く世に示すことで「挙国一致」の世論を作るべく言論活動を行ったのである。その政治思想は展開していく世界情勢に常に影響され変容しながらも、日本がアジアを率いて「亜欧米鼎立」の世界の実現を目指すという点において終始一貫したものであった。

明治二十二年四月、柴は有馬温泉に滞在し風邪で横臥していた。その折、同行の高橋太華から高橋が主宰する少年雑誌『少年園』への寄稿を請われた。柴は少年には「大人君子の伝記」がよいだろうと、枕頭の「米人編スル所ノ虞令礼伝」をもとに「虞令礼氏ノ伝」を書いた。<sup>(99)</sup>「虞令礼」すなわちグリーリー（Horace Greeley 一八一―一八七二）は、一八四〇年代から一八七〇年代にアメリカでも最も影響力ある新聞であった「ニューヨーク・トリビューン」紙を発行した人物であり、政治家でもあった。<sup>(100)</sup>柴はその伝記を「米国南北戦争ノ時ニ当リ、非常ノ大功ヲ奏シタルモノニ人アリ」と書き出している。一人は「兵力」により、一人は「筆力」に頼ったといい、「而シテ筆力ノ功爰ニ兵力ニ優リタリト云フ、兵力ノ功アル者ヲ誰トカ為ス、倶蘭士將軍是ナリ、筆力ノ功アル者ヲ誰トカ為ス、寶刺虞令礼氏其人ナリ」と述べている。その伝記は少年向けらしくグリーリーの少年時代の言行に紙数が割かれているが、その末尾で柴は「氏ハとれびゆん新聞ニ筆ヲ執ル傍ニ、或ハ雑誌ニ稿ヲ寄セ、或ハ講談演説ヲナシ、其他諸種ノ良著述ヲナシテ世人ヲ益シタリ。」

と述べて、グリーンリーを「真ニ曠世ノ偉人ト謂フ可シ。」と評している。この少年向けに書かれた一文に柴の「筆力ノ功」に対する思いが見て取れる。ここで述べている通り、柴は兵力に優る「筆力ノ功」を信じて自らそれを実践しようとしたのではないだろうか。柴には自著『佳人之奇遇』が当時「読まぬ者がなかった」ほどのベストセラーとなった経験があった。その時に「筆力」の及ぼす影響力を強く実感したのであろう。「著述ヲナシテ世人ヲ益」すこと、このことを柴は自らに課していたのだろう。それはまた一方で、「筆力」によって「挙国一致」の体制を作りあげようとした、柴の政治活動でもあったのである。

本稿は柴の生涯を追うことに終始してしまった感が否めないが、これまで知られてこなかった柴が関わった著作物を新たに加えることができた。今後は各段階における柴の思想と行動を詳論していくことによって、近代日本史における柴四朗の独自性を明らかにしていきたいと考えている。

## 注

- (1) その他には、第十二回衆議院議員選挙に際し印刷された菊池三樹による推薦文「(柴四朗君ノ人物及閱歴)」(会津若松市立会津図書館蔵、大正四年)、『東亜先覚志士記伝』(黒龍会、昭和十一年)がある。
- (2) 柳田泉『政治小説研究 上巻』(春秋社、昭和四十二年)。前田愛『幕末・維新期の文学』(法政大学出版局、昭和四十七年)。飛鳥井雅道『天皇と近代日本精神史』(三一書房、昭和六十四年)。松井幸子『政治小説の論』(桜楓社、昭和五十四年)。井上弘『近代文学成立過程の研究―柳北・学海・東海散士・蘇峰―』(有朋堂、平成

七年)等。

(3) 例えば同書には、第一回衆議院議員総選挙で柴が立候補したが落選したとの記述があるが、柴はそのとき立候補を見送っているので誤りである(本稿第三章第一節参照)。また柴が社員であった『東京電報』や『二六新報』に柴の記事が見られないとあるがこれも誤りである(本稿第二章第二節および第三章第二節参照)。

(4) 拙稿『東海散士柴四朗の政治思想―政治小説『佳人之奇遇』発刊以前―』(『史窓』五六号、京都女子大学史学会、平成十一年)。拙稿『佳人之奇遇』を読む―小説と現実の「時差」―』(『史窓』五八号、京都女子大学史学会、平成十三年)。拙稿「柴四朗の「国粹保存主義」―『大阪毎日新聞』主筆就任から退社まで―」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』一号、平成十四年)。拙稿「柴四朗の国権論―『佳人之奇遇』における「自由」―」(『史窓』六〇号、京都女子大学史学会、平成十五年)。拙稿『「東京電報」における柴四朗―「高島炭坑視察実記」―』(『京都女子大学文学研究科研究紀要史学編』二号、平成十五年)。

(5) 柴家の男子は母の計らいで面川沢の別荘に預けられた第五郎を除く全員が戦闘に参加し、次兄謙介が戦死、長兄太郎、三兄五三郎、四朗は命を長らえたが、実家にいた祖母、母、姉そい、妹さつは八月二十三日の政府軍城内侵入と同時に自刃した。長姉かよは嫁ぎ先木村家一家と共に自刃、生き残った女子は望月家に嫁いだ姉つま一人である。

(6) 『東京日日新聞』一四九二号、明治九年十一月二十四日。

(7) 柳田前掲書は、この一文は、柴が「この時既に若干の小説家的手腕と想像力をもっていることを証明したものの」であると述べる。

(8) 『東京日日新聞』一五七六号、明治十年三月九日。

(9) 山川浩（一八四五—一八九八）は弘化二年、会津に生まれる。斗南へ移封後は藩の大参事となり半紙移住計畫を定めて授産の法を講じて尽力した。西南戦争では西征別働旅団の参謀に任ぜられた。貴族院議員、陸軍少将、男爵。

(10) 石光真人編著『ある明治人の記録—会津人柴五郎の遺書』（中央公論社、昭和四十六年）。

(11) 西南戦争後、柴は戦史編纂御用掛を命じられて戦史編纂に従事した。

(12) 「旧会津藩士柴四朗氏ガ旧同藩士ニ寄送セシ書」『東京日日新聞』一四七七号、明治九年十一月六日。思案橋事件は、旧会津藩士永岡久茂が計画した土族反乱である。

(13) ワートンスクールについては大沼敏男「東海散士柴四朗略伝—人と思想」大沼敏男・中丸宣明校注『新日本古典文学大系 明治編 政治小説集二』（岩波書店、平成十九年）に詳しい。

(14) アイルランド移民。ペンシルヴァニア大学卒業後、アメリカで最初の社会学の教授となった。講義内容については上野格「続東海散士（柴四朗）の蔵書—明治初期経済学導入史の一駒—」『経済研究』六四号（成城大学、昭和五十四年）および大沼前掲論文が詳しい。

(15) Henry C. Carey 著・犬養毅訳『訂正圭氏「経済学」第四版』（博文堂、明治二十四年刊）。

(16) 前掲拙稿「東海散士柴四朗の政治思想」。

(17) 『佳人之奇遇』におけるアイルランドの知識はこのトンプソンの講義の影響であることは、上野前掲論文に詳しい。

(18) 柳田前掲書。

(19) 前掲拙稿『佳人之奇遇』を読む。前掲拙稿「柴四朗の国権論」。

(20) 拙稿「東海散士著『佳人之奇遇』の成立について」(『京都女子大学害学院文学研究科研究紀要史学編』三号、平成十六年)。

(21) 『帝國議會衆議院議事速記録』一九号(東京大学出版会)。韓国併合について事後承諾を求める件についての演説の中で柴は「私が朝鮮ノコトニ關係ヲ致シマシタノハ犬養君ノ紹介ニ依リマシテ始メテ彼ノ亡命客金玉均、朴泳孝諸氏ト交際ヲ致シマシテ、彼ノ亡命客ガ日本ノ声援ヲ當テニシテ事ヲ挙ゲマシタトコロガ、事破レテ日本ニ亡命致シマシテ、而シテ日本政府ハ列国ヲ憚ツテ殆ド捨テ、路傍ノ人ノ如ク、又有志家モ尚之ヲ助ケナイト云フコトデアリマシタガ、犬養君ハ之ニ同情ヲ表シマシテ大ニ朝鮮ニ向ツテ事ヲ為サントセラレマシタコトカラシテ、吾々ガ之ニ關係ヲシ始メタノデゴザイマス」と述べている。

(22) 『佳人之奇遇』五編卷十。金玉均(一八五一〜一八九四)は朝鮮王朝末期の開化派独立党の指導者。当時、甲申事變の失敗により日本に亡命していた。明治二十七年(一八九四)上海で暗殺された。

(23) (明治十九年)一月四日付谷干城宛柴四朗書簡『谷干城関係文書(立教大学図書館所蔵)』(北泉社、平成七年)所収。谷干城(一八三七〜一九一一)は軍人、政治家。号は隈山。柴とは行動を共にすることが多かったが、谷は後年、日露開戦に反対論を唱え、日英同盟にも批判的態度をとった。

(24) 谷干城「洋行日記」(日本史籍協会編『谷干城遺稿 二』東京大学出版会、昭和五十年)、農商務省『欧米巡回取調書』復刻版(龍溪書舎、平成七年)。

(25) 堀口修『明治立憲君主制とシユタイン講義―天皇、政府、議會をめぐる論議―』(慈学社出版、平成十九年)には七月二十六日から十月四日までの講義録全文が収載されている。シユタインは国家学者。ウィーンにおいて日本政府の調査、諮問に応えた。谷と柴も「シユタイン詣で」をした人物に数えられる。

(26) 堀口前掲書。シュタインは八月二十六日の講義においても「早ク朝鮮ノ内治ニ充分ニ干渉スルノ權アレハ、失ハサル中ニ其一部ヲ占領スヘシ」と発言している。

(27) 鳥尾小弥太（一八四七—一九〇五）は軍人、政治家。明治十八年国防会議議員、元老院儀官に任ぜられ欧州見学。

(28) この欧米視察で柴が面会したアラビー・パシヤ、オスマン・パシヤ、コシユート・ラヨシユはこれ以後執筆される『佳人之奇遇』に登場し、それぞれ重要な役割を与えられている。

(29) 前掲拙稿注（20）。

(30) 井上馨侯伝記編纂会『世外井上公伝』第三卷（内外書籍、昭和九年）。

(31) 『日本』九六五号、明治二十五年一月三十一日の記事に、「東海散士、奥の会津に候補者たり、一日政治上の意見を述べて曰く、予が意見は佳人之奇遇第八卷に同じと、自著の小説を把て宣言に代ふ、亦奇」とある。『佳人之奇遇』鼈頭の評者の言にも「余読至此。不覺大呼曰。似哉似哉、何其相似之甚也。」とあって読者も日本政府批判と読むように意図されている。

(32) 前掲拙稿注（20）。

(33) 前掲拙稿『『東京電報』における柴四朗』。なお後藤は既に『佳人之奇遇』二編卷三（明治十九年一月刊）に序文を寄せているので、柴とは早くから交流があったとみられる。

(34) 『東京電報』改題創刊四七五号、明治二十一年四月九日。

(35) 『東京電報』六〇九号、明治二十一年九月十二日—六二八号、同年十月五日。

(36) 前掲拙稿注（33）。

- (37) 前掲拙稿「柴四朗の「国粹保存主義」」。
- (38) 『日本人』五号、明治二十一年六月三日。
- (39) 前掲拙稿注(37)。
- (40) 同前。
- (41) 『経世評論』一号、明治二十一年十二月七日。
- (42) この論説に關して『東雲新聞』主筆中江兆民との応酬があるが、このことについては稿を改めて論じる。
- (43) 「欽定内閣(東洋のビスマルク)」(『経世評論』七号、明治二十二年三月一日。「帝国憲法疑解」『経世評論』七号、明治二十二年三月一日〜一〇号、同年 四月十九日)。
- (44) 前掲拙稿注(37)。
- (45) 『日本』一八〇号、明治二十二年十月一日に『経世評論』第二十号は治安に妨害ありと認められ発行停止処分を受けたとの記事がある。これ以降の『経世評論』の存在は今のところ確認できていない。
- (46) 「東北漫遊紀行」は未完のようである。この記事は後に塩津梅編輯『研学叢書 春花秋月』(陸軍受験講義録編輯所、明治二十九年刊)に再録されている。
- (47) 三浦は日付を「十月十五日か十六日であつたと思う」と述べている。三浦梧楼『觀樹將軍回顧録』(政教社、大正十四年三月)。三浦梧楼(二八四六〜一九二六)は軍人、政治家。号は觀樹。明治二十一年十一月から同二十五年三月まで学習院長であつた。
- (48) 頭山滿翁正伝編纂委員会『頭山滿翁正伝(未定稿)』(葦書房、昭和五十六年)に「大隈がいよいよやるといふので、天下挙つて反対したけれども何の効果もない。それで電信で来島を呼んだ。此快挙については同士中

にも自分に引受けさせて呉れといふ者があつたが井上の当時中止せしめた行掛りがあるので、今回は来島が優先権を持つてゐた。それで誰もこのことでは、彼と争ふことは出来ん。初め短刀でやる筈ぢやつたが、柴四朗が『大井憲太郎のところには本当の用に立つ厳めしい爆裂弾を製造する奴がある。あそこには持つてゐる筈だ』といふことを自分に言つたから『あ、さうか』自分は「大井憲太郎には会つたことはないが、直接借りようと思つて尋ねて行つた。」とある。

(49) 東海散士編『埃及近世史』(敬業社、明治二十二年刊)。なお、同書原稿の一部は「埃及行政の内情」、「埃及海樓府 雑感の一」と題して同書発行に先立ち『経世評論』一六号、明治二十二年七月十九日および一八号、同年八月十六日に掲載されている。

(50) Malotie, Baron de, Egypt, native rulers and foreign interference, London, 1883. Keay, J. Seymour, Spoiling the Egyptians, a tale of Shame, told from the British Blue Books, New York, 1882. 会津若松市立会津図書館に柴四朗寄贈書として所蔵されているこの二書を筆者が同図書館で確認したところ、中に柴の書き込みやアンダーラインが引いてあつたが判読は困難である。

(51) 従来、先行研究では、柴が『佳人之奇遇』および『埃及近世史』を著したことについて、柴の「小国への共感と連帯感」の表明とされてきた。近年でも藤田みどり『アフリカ「発見」日本におけるアフリカ像の変遷』(岩波書店、平成十七年)は「アフリカ人に対する日本人の連帯感を熱烈に述べた」書として『佳人之奇遇』および『埃及近世史』を紹介しているが、柴にエジプトに対するある種の共感があったとしても連帯感があつたのかどうかという問題については検討の余地がある。

(52) 『日本』二四六号、明治二十二年十二月十四日。

(53) 川崎紫山(一八六四—一九四三)。一時期、北村三郎と名乗る。ジャーナリスト。日清戦争時に従軍記者。明治三十四年、頭山滿、内田良平等と黒龍会を創設した。

(54) 谷干城「日記」(日本史籍協会編『谷干城遺稿 二』東京大学出版会、明治四十五年) 明治二十二年二月二十一日条には「柴氏来る、(中略) 柴氏は自身国会資格の談あり、余成る丈今から為すべきを談して別る」とあり、当時谷と柴は柴の政界入りを目論んでいたことが明らかである。

(55) 「柴四朗の書」(『日本』四一八号、明治二十三年六月二十六日)。

(56) 「撰拳遺聞」(『日本』四二九号、明治二十三年七月七日)。

(57) 江南哲夫『朝鮮財政論』(慶雲堂、明治二十八年三月刊)には、明治二十二年十月の江南哲夫による自序があり、同二十三年四月の広沢安任跋文があることから刊行年より早い段階で完成していたものとみられる。

(58) 『朝鮮財政論』はこれまで全く知られてこなかった柴が関わった書籍である。例えば上野前掲論文では、帰国後の柴は「その実用の学を経済学または経済論という分野では行かざなかつたようである。『佳人之奇遇』の突然の大評判が、経済学士を経済学から遠ざけたのかもしれない。」と述べる。また中井前掲書でも「四朗は洋行帰りの経済学士であるが、その肩書きを活かした活動はほとんど見られない」(301頁)とあるが、これらの指摘はいずれも正されるべきであろう。

(59) 鈴木天眼(一八六七—一九二六)は旧二本松藩士で朝鮮問題に深く関わり、日清戦争の頃には「天佑使」(朝鮮東学党と接触した壮士集団)を組織した。雑誌『活世界』を主宰し、『二六新報』、『九州日の出新聞』、『東洋日の出新聞』を創刊した。同郷人である柴と鈴木の交情は柴が鈴木天眼著『独尊子』(博文堂、明治二十一年一月刊)に寄せた序文で知ることができる。また天眼は『佳人之奇遇』執筆にも関係したといわれる。

- (60) 「故須多因博士の条約改正論」『二六新報』三号、明治二十六年十一月二日・四号、同月三日・五号、同月五日。
- (61) 酒田正敏『近代日本における対外硬運動の研究』（東京大学出版会、昭和五十三年）。
- (62) 例えば『二六新報』一一三号、明治二十七年三月三十一日は、「金朴両氏が志業の成らざるを惜み且つその他郷流寓の不幸を憐みて力を添えたる本邦の志士少からざる中にも、柴四朗氏は特に深く両人の為に斡旋する所ありたり」と報じている。
- (63) 『二六新報』一七七号、明治二十七年六月二十二日。「柴四朗氏は本社創業以来力を編輯上に尽されしが、目下政局日に多端、十分新聞事業に従ふ能はず旁々氏の都合に任せ協議の上二先づ本社との関係を絶つこと、せり、本社は特に深く氏が従来の尽力を謝す」とある。
- (64) 井上雅二『巨人荒尾精』（佐久間書房、明治四十三年）。荒尾精（一八五八〜一八九六）は陸軍軍人、大陸浪人。明治十九年、参謀本部の命を受けて中国へ渡る。日清貿易研究所は荒尾精が日清提携のための人材養成を目的とした商業学校で上海に創立した。荒尾は『佳人之奇遇』六編卷十一に序歌を寄せている。
- (65) 前掲菊池三樹「〔柴四朗君ノ人物及閱歴〕」。
- (66) 明治二十八年七月五日付谷干城より伊藤博文宛書簡（前掲『谷干城遺稿三』）。
- (67) 朝鮮国駐劄井上公使ヨリ西園寺外務大臣臨時代理宛「新聞記事二関シ意見具申ノ件」（明治二十八年七月二十七日電報）（『日本外交文書』第二八卷第一冊三四四）。
- (68) 『国会』明治二十八年九月八日。
- (69) 前掲『観樹將軍回顧録』。
- (70) このことについては、松井幸子『佳人之奇遇』卷十六とその政治的背景』（『山口大学教養部紀要（人文科学

編』二二卷、昭和六十四年)に言及がある。詳細は別稿で述べたい。

(71) 内田定植領事より西園寺外務大臣臨時代理宛(明治二十八年十一月五日)「十月八日朝鮮王城事変ノ詳細報告ノ件」(『日本外交文書』第二八冊第一冊四二四)。

(72) この時増島六一郎が柴の弁護人となった(『日本』二二二四号、明治二十八年十一月二日)。弁護士増島六一郎(一八五七〜一九四八)は中央大学創始者の一人で、イギリス留学後、法曹界で英米法の權威として活躍した。「佳人之奇遇」三編巻五に序文を寄せている柴洋行中の同書発行を託された人物である。

(73) これより早く明治二十八年十月二十三日に谷干城は伊藤内閣に対し意見書を提出しており(『京城事件の善後策』(『谷干城遺稿 三』)、谷の意見と柴の見解は一致している)。

(74) 柴四朗・国友重章「八日事変の原因」(『八日事変報告』『日本』二二二六号、明治二十九年二月二十二日・二二二六号、同年二月二十七日)。(『東京朝日新聞』三三七三号、明治二十九年二月二十三日〜三三七九号、同年三月一日まで六回連載)。

(75) 『第九回帝國議會衆議院議事速記録』二四号。

(76) 柴四朗「対韓私見」(『日本人』一七号、明治二十九年三月五日)。

(77) 「進歩党代議士總會詳報」(『日本』二九三二号、明治三十年十一月六日)。

(78) 近衛篤磨日記刊行会編『近衛篤磨日記』(鹿島研究所出版会、昭和四十三年)。

(79) 前掲『頭山満翁正伝』(未定稿)。

(80) 酒田前掲書には第十三議会で成立した地価修正は憲政本党(柴属す)の地盤であった東北地方にとってきわめて不利なものであり、「憲政本党は地盤保全のために反対せざるを得なかった」との指摘がある。

- (81) 酒田前掲書。
- (82) 東海散士著『日露戦争羽川六郎』(有朋館、明治三十六年十一月刊)の「国民同盟会」の章において柴は「北清より帰り来れる一議員の演説」として当日の自身の演説内容を全文載せている。
- (83) それは『佳人之奇遇』最終巻から連続した時期よりストーリーが始まっていることから明らかである。また同書の記述の割註に「佳人之奇遇第二巻に詳かなり」とするなど、『佳人之奇遇』と併行して読むことを前提としている。
- (84) 新聞等に掲載された同書広告文。「日露の関係は我神州未曾有の国難なり、今は実に憂然一声砲火正に爆発せんとするの瞬間に在り、唯其れ海戦は如何、陸戦は如何、露国及び列強の情勢は如何、抑勝敗の決は果して如何、此書は小説にして小説にあらず、実伝にして実伝にあらず、東海散士が縦横なる文藻を確実なる事実に寓し平易に明暢に此問題を解決して我国民諸君の一粲を博せんとするものなり」
- (85) 熊谷昭宏「飛行と(未来)の日露戦争—東海散士『日露戦争羽川六郎』を中心に—」(『同志社国文学』六一号、平成十六年)。
- (86) 『日本』五一三〇号、明治三十六年十一月十四日。
- (87) 柳田前掲書。
- (88) 前掲「(柴四朗君ノ人物及閱歴)」。
- (89) 酒田前掲書。
- (90) 前掲「(柴四朗君ノ人物及閱歴)」。
- (91) 『帝国議会衆議院議事速記録』一九号。

- (92) なお柴は対韓同志会においても活動している。
- (93) 林原純生「佳人之奇遇」の変貌」(『日本文学』三九(一一)、平成二年)。
- (94) 藤田前掲書。
- (95) 前掲「柴四朗君ノ人物及閱歴」によれば、「清国知名ノ志士ニ会见シ、南船北馬能ク其真況ヲ探リ、又能ク南北ノ大總統袁世凱、孫逸仙等ニ会见シ、親シク意見ヲ交換セラレタリ、但シ南北ノ両大總統ニ会见シテ意見ヲ交換セシ人ハ、委員中唯柴君一人」であつたという。
- (96) 故東海散土著『世界盲人列伝』柴守明、昭和七年は、柴の死後に養子守明が叔父五郎の援助を得て出版した。同書は、柴が三十年余りをかけて世界中から集めた数百名の盲人の伝記から二百九十五人を選んで著述したもので、中国周代の神瞽伝からヘレン・ケラーに及んでいる。大正二年十二月二十五日に書かれた序文で、柴は東西の盲人に関する史伝を著すために欧米および中国、韓国においても書籍を探したと綴っている。
- (97) 前掲『東亜先覚志士記伝』。
- (98) 柴を記名した投票用紙に「殿」「閣下」と敬称が付けられているため無効票となり、わずか一票差で落選したが、この二票について訴訟を起こし勝訴、当選となった。
- (99) 「虞令礼氏ノ伝」(『少年園』一三号、明治二十二年五月三日〜一九号、同年八月三日まで六回連載)。
- (100) グリーリーは南北戦争中に「二〇〇〇万の祈り」と題した公開状を発表し、リンカーンの漸進主義政策を批判し、奴隷の即時解放を主張した。戦後は南部人に対する一般大赦と普通選挙の実施を主張した。一八七二年、自由共和党から大統領候補に指名されたが、大敗した。